# 長岡京左京三条三坊十六町跡

2020 有限会社 京都平安文化財



1. 長岡京期建物跡 1~3 他全景 東から (長岡宮跡及び西山を望む)



2. 長岡京期建物跡 1・2 の柱穴の掘り下げ調査状況 西から



調査地位置図-1

# 例 言

- 1. 本書は、京都市伏見区久我西出町 5 番 15 において、工場建設に伴う発掘報告書である。 【文化財保護課受付番号 16NG585】
- 2. 本調査は、京阪セロファン株式会社の委託により有限会社京都平安文化財が実施した。
- 3. 発掘調査の面積は、1,120㎡である。
- 4. 発掘調査は平成 30 年 12 月 4 日から平成 31 年 3 月 15 日まで実施した。 整理・報告書作成は平成 31 年 3 月 18 日から令和 2 年 10 月 15 日まで実施した。
- 5. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制で行なった。

指 導 機 関 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調 査 主 体 有限会社京都平安文化財 (代表取締役 栗田尚典)

調 査 員 小泉信吾、小森俊寛、小林雅幸

調査補助員 谷原 未紗

作 業 員 有限会社京都平安文化財

測量·図化 浅川 永子、小林、田中 侑

遺物実測 川端玲子

6. 調査検証委員会として下記の方々のご指導を頂いた。(五十音順、敬称略)

京都外国語大学外国学部英米語学科教授 南 博史

同志社女子大学現代社会学部システム学科教授 山田 邦和

- 7. 本書の構成と編集の基本は小森と小泉、編集実務は小林が中心となり、田中が補佐した。
- 8. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を小林、遺物写真を小森が撮影、小林が補佐した。
- 9. 木材分析については、福田さよ子氏(奈良県立橿原考古学研究所)に依頼した。
- 10. 本書の執筆は、第 1 章 1 ~ 3 は小森・小泉、第 2 章 1 は小森、2 は小泉、第 3 章 1 は小森、2 は小泉、第 4 章 1 は小森、2 は福田、第 5 章 は小森が担当した。
- 11. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。(五十音順、敬称略)

井戸竜太、上原真人、木村泰彦、國下多美樹、久保直子、大洞真白、永田信一、山口 博、山中 章

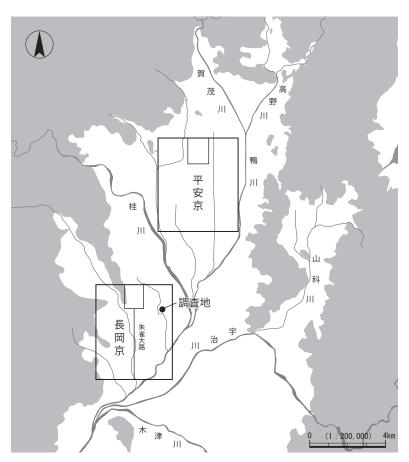
京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター、(公財) 京都市埋蔵文化財研究所

(公財) 長岡京市埋蔵文化財センター、(公財) 向日市埋蔵文化財センター

## 凡例

- 1. 調査に使用した座標値は、世界測地系(国土座標第VI系)に基づいている。水準点は T.P 値(東京湾平均海面値)を使用し、本文中では「T.P」と略称している。
- 2. 地図は京都市都市計画局発行の1:2,500「寺戸」「久世」「向日町」「久我」を使用し編集した。
- 3. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄、1994)を使用した。
- 4. 土器類の型式・編年は、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』(京都編集工房、2005年11月15日)による。
- 5. 遺構図は各図にスケールを掲載し、平面図は縮尺を 200・250・300・400 分の 1、断面図は縮尺を 100 分の 1、個別図は縮尺を 20・40・50・100・150 分の 1 で掲載している。
- 6. 遺構名は柱穴、土坑、溝、流路などと表記し、遺構の種類別に一連の通し番号を付加した。 ただし、建物については遺構とは別の番号を付加した。
- 7. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。 ただし、第 44 図は縮尺 8 分の 1、第 50 図は縮尺 1 分の 1 で掲載している。
- 8. 遺物番号は各図ごとに通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
- 9. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ拡大、縮小した。
- 10. 本書に収録した図資料などの引用、参考文献、索引は、第2章章末に【参考文献】として掲載した。



調査位置図-2

# 本文目次

# 例 言 • 凡 例

第1章	調査の経緯と経過		1
	1. 調査に至る経緯	1	
	2. 発掘調査の経過	3	
	3. 調査日誌抄	6	
第2章	位置と環境		9
	1. 地理と歴史的環境	9	
	2. 既往の調査	13	
第3章	調査成果		16
	1. 基本層序	16	
	2. 遺 構	20	
	(1) 遺構面と成立遺構 20		
	(2) 平安時代以後の遺構22		
	(3) 長岡京期の遺構 27		
	(4) 奈良時代以前の遺構 34		
第4章	遺 物		40
	はじめに	40	
	1. 出土遺物	41	
	2. 柵用材を含めた流路 1、流路 2 から出土した		
	木製遺物の樹種について	54	
第5章	考察とまとめ		60
	1. 考 察 - 長岡京期の建物配置と敷地使い	60	
	2. まとめ	62	

報告書抄録

図 版

# 挿図目次

第1図	長岡京における調査位置図	1	第 27 図	溝 1・2・12・17 及び溝状遺構 11	
第2図	調査区位置図	2		平•断面図	25
第3図	調査区と地区割り図	3	第 28 図	溝 18 及び溝状遺構 3・4 平・断面図	26
第4図	調査地全景と調査区設定 北西から	4	第 29 図	長岡京期の遺構平面図	27
第5図	機械掘削南壁沿い西進 東から	6	第 30 図	建物 1 南から ※推定 正(前)殿	28
第6図	溝1・2の掘り下げ調査作業風景		第31図	建物1柱穴4・6検出、半裁、	
	北から	6		平•断面図	29
第7図	長岡京期建物 1 他検出作業風景		第 32 図	建物 1 平・断面図	30
	北西から	6	第 33 図	建物 2・3 平・断面図	31
第8図	建物1南庇検出を目的とした掘り下げ調査	7	第 34 図	流路 1 平·断面図	32
第9図	建物 1、柱穴掘り下げ調査 南東から	7	第 35 図	流路 2 セクション土層断面図	34
第 10 図	建物 2・3、柱穴掘り下げ調査風景		第 36 図	流路2平面図	35
	北から	7	第 37 図	流路 2・柵 (しがらみ) 平面図	37
第11図	流路 1、掘り下げ調査風景 北から	7	第 38 図	柵(しがらみ)立面図	37
第 12 図	現地説明会風景 北東から	8	第 39 図	流路 2・柵 (しがらみ) 断面概念図	38
第 13 図	流路 1・2、柵 (しがらみ) 掘り下げ調査		第 40 図	西羽束師川の旧流路の復元案	39
	南から	8	第41図	流路 1 下層・最下層出土弥生土器	42
第 14 図	流路 2、柵 ( しがらみ ) 掘り下げ調査		第 42 図	流路 2 出土弥生土器 · 石製品	43
	北東から	8	第 43 図	流路 2 出土木製品	44
第 15 図	長岡京域位置図		第 44 図	流路 2 出土柵 (しがらみ) 関連材	45
	〔昭和7年長岡京・淀 部分修正〕	10	第 45 図	湿地出土須恵器高坏	46
第 16 図	長岡京条坊図	12	第 46 図	長岡京期の土器・陶磁器	47
第 17 図	長岡京左京北部の既往調査位置図	14	第 47 図	長岡京期の瓦	49
第 18 図	土層断面概念図 16-	17	第 48 図	平安時代後期の中国宋輸入白磁	50
第 19 図	全遺構平面図	18	第 49 図	中世の土器	50
第 20 図	東壁土層断面図	19	第 50 図	中国輸入銭貨	50
第21図	南壁土層断面図	19	第51図	出土木質遺物樹種顕微鏡写真 1	58
第 22 図	平安時代以後の遺構平面図	20	第 52 図	出土木質遺物樹種顕微鏡写真 2	59
第 23 図	長岡京期の遺構平面図	21	第 53 図	京都市山城高校遺跡建物配置図との	
第 24 図	奈良時代以前の遺構平面図	21		合成概念図	60
第 25 図	平安時代以後の遺構平面図	23	第 54 図	推定長岡京左京三条三坊十六町における	
第 26 図	竹筒を用いた暗渠の模式図	24		長岡京期建物位置図	61

# 表目次

第1表	出土土器一覧表
第2表	出土遺物観察表
第3表	出十木質遺物樹種同定結果一覧

## 図版目次

- 巻頭図版 1. 長岡京期建物跡 1 ~ 3 他全景 東から(長岡宮跡及び西山を望む) 2. 長岡京期建物跡 1・2 の柱穴の掘り下げ調査状況 西から
- 図版 1 1. 調査地全景 東から(長岡宮跡・西山を望む) 2. 平安時代から中世 遺構面検出状況 西から
- 図版 2 3. 中世以降の水田及び湿地完掘状況 南西から 4. 中世以降の水田及び湿地完掘状況 北西から
- 図版 3 5. 平安時代以後の遺構 V群溝検出状況 北から 6. 平安時代以後の遺構 V群溝完掘状況 北から 7. 近世〜近代以降、中世 I・Ⅱ 群溝完掘状況 北から 8. 中世 Ⅱ 群溝 12・13 完掘状況 南から
- 図版 4 9. 中世 IV群溝状遺構群完掘状況 北から 10. 溝状遺構 3 暗渠竹材 北から 11. 溝状遺構 11 暗渠竹材 北西から 12. 溝状遺構 10 暗渠竹材 北から 13. 溝状遺構 11 暗渠竹材 北西から
- 図版 5 14. 長岡京期 全景(建物1~3・流路1) 東から 15. 長岡京期 全景(建物1~3・流路1) 西から
- 図版 6 16. 長岡京期 建物 1 身舎・北庇 南から 17. 長岡京期 建物 2・3 北から 18. 建物 2 北から 19. 建物 3 北から
- 図版 7 20. 建物 1 全景 西から 21, 建物 1 全景 北から
- 図版 8 22. 建物 1 柱穴 6 南西から 23. 建物 1 柱穴 7 西から 24. 建物 1 柱穴 11 北から 25. 建物 1 柱穴 12 北から 26. 建物 1 東辺柱穴列 手前柱穴 20 北庇 北から 27. 建物 1 南庇 柱穴 21 東から 28. 建物 1 南庇 柱穴 24 北から
- 図版 9 29. 建物 2 柱穴 1 東から 30. 建物 2 柱穴 2 東から 31. 建物 3 柱穴 2 西から 32. 建物 3 柱穴 7 西から 33. 流路 1 上層 建物 2・3 南から
- 図版 10 34. 流路 1 上層 建物 2・3 北西から 35. 流路 1 下層・流路 2 南東から
- 図版 11 36. 流路 1 下層・流路 2 (柵) 南東から 37. 流路 1 下層・流路 2 (柵) 東から
- 図版 12 38, 流路 1 下層・流路 2 全景 北から 39. 流路 2 柵検出 南東から 40, 流路 2 柵 南東上から 41. 流路 2 柵 北西から 42. 流路 2 柵 北から
- 図版 13 遺物(弥生時代)
- 図版 14 遺物(長岡京期)
- 図版 15 遺物(長岡京期)
- 図版 16 遺物(長岡京期・平安時代後期・中世)

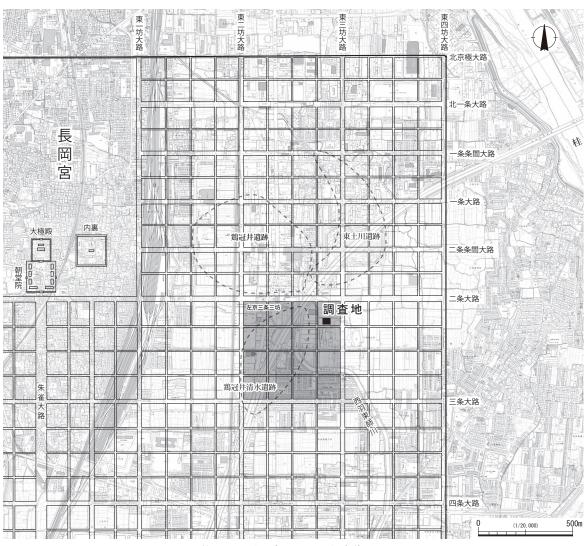
# 第1章 調査の経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

### 調査に至る経緯

本調査は、2018年度に京都市伏見区久我西出町5番15において実施した、京阪セロファン株式会社の工場関連施設建設に伴う事前の発掘調査である。施設の建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下文化財保護課と略称)が試掘調査を行なった。その結果、工場建設予定地内には、弥生時代頃から長岡京期頃と見られる遺構の残存が明らかとなり、本調査が必要と判断された。

本調査は文化財保護課の指導の下で、京阪セロファン株式会社から有限会社京都平安文化財が 依頼を受けて、発掘調査を実施することとなった。調査対象地は、工場敷地の北西ブロック内で あり、調査区は東西 40m×南北 28m の 1,120㎡である。発掘調査は平成 30 年 12 月 11 日から

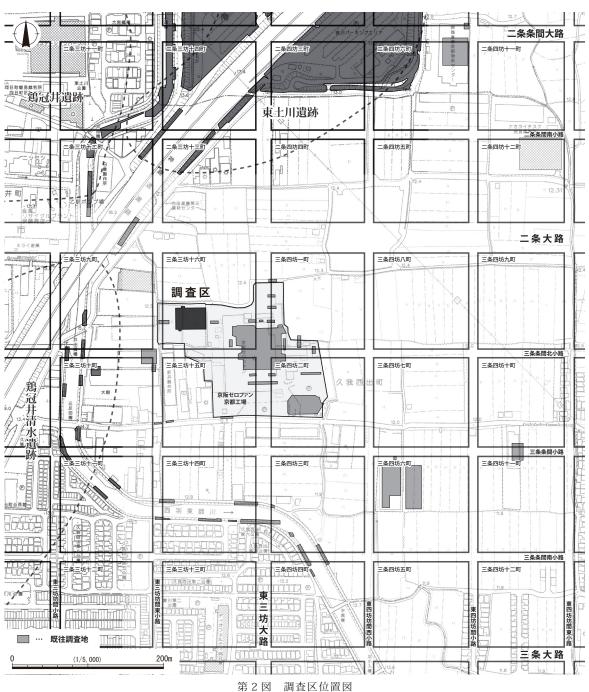


第1図 長岡京における調査位置図

開始し、平成31年3月15日に全ての調査、及び関連実務を終了している。

### 調査目的

当調査地の南東近接地では、昭和60年(1985年)の既往調査において、南北道路・東三坊大路と三条条間北小路の交差点部や建物跡など、8世紀末の長岡京期の各種遺構を調査している。これらの既往調査成果を踏まえて、向日市が提示している長岡京条坊復元案に拠れば、当調査地は長岡京左京三条三坊十六町内の南西区内に位置している。同十六町内の建物を含めた宅地内の土地利用の解明が、重要な調査課題の一つである。また、試掘調査では本調査区東部において、弥生土器片を包含する湿地状の堆積土を確認しており、弥生時代の遺構の様相把握も、もう一つの大きな調査課題である。



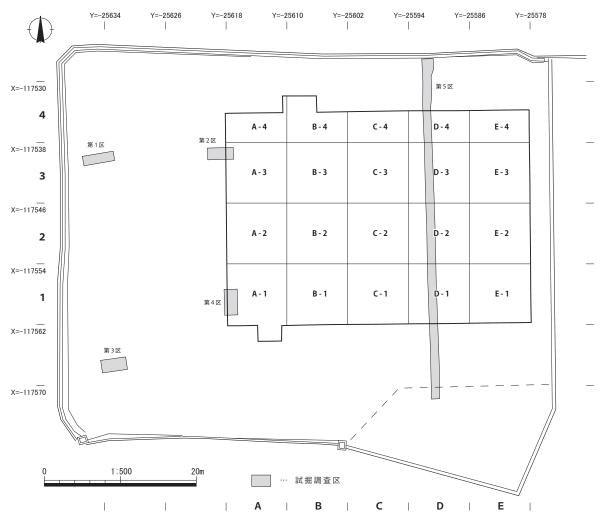
2

### 調査区と調査方法

調査地は、工場敷地内の北西区域に位置しており、試掘や周辺既往調査から工場関連施設の建設予定範囲の主要部を、ほぼカバーする形で設定している。調査による検出遺構や遺物の調査進行過程での記録(保存)などを考慮して、調査区全域を対象として世界測地系の南北X軸、東西Y軸を利用して、8mを単位としたグリッドを設定した。試掘資料に拠ると、長岡京期遺構面が現表土から2.2~2.3mの深さに至る。この内2m程は地盤改良した工場の基礎整地土層であり、それ以外は耕作土層である。このため実際の調査においては、整地土層及び耕作土層は機械力により排除する方法で、中世~一部長岡京期の遺構面をほぼ検出することとした。機械掘削の後は手作業によって遺構面を検出し、検出遺構を掘り下げ調査する発掘調査方法をとっている。

### 2. 発掘調査の経過

当調査区の範囲は建設予定地の約 1,120㎡である。試掘調査に拠れば、現表土下 2m 強は現在の工場建物の基盤土層を形成する盛土とその直下の近世以降の耕作土であった。目的の遺構面検



第3図 調査区と地区割り図

出は機械掘削の当初から 2m を超える深さとなると想定され、人力による遺構面検出作業は調査開始当初から 2m 強の深い所での作業となると予想された。機械掘削で生じる排土量が多かったため排土の対処が大きな問題となり、それにも増して、深い遺構面上での人力作業の安全確保がより重要な課題であった。このため調査区壁面崩落の危険性への安全面からの対処として、壁面は勾配のある法面とし、さらに表土下 1.5~ 1.6m 程で幅 0.8m 程の犬走り状の段を設けて、深い遺構面での人力による平面調査を行った。機械掘削は層位を確認しながら徐々に掘削を進めた。

地表下約2.0~2.2mの深さで、盛土と耕作土を主対象とした機械掘削がほぼ終了した地区から、 壁面整形と遺構面の検出作業を人力によって進め、調査区東側部の遺構検出作業では試掘トレン チの範囲が確認されたので調査手順を踏まえて掘り下げた。試掘の段階で部分的に検出され、遺 構とされていた落込みも確認したが、時代や遺構性の確定は調査の進展後と理解した。

調査区全域を対象とした遺構面検出作業は、平安時代後期から中世初期には埋没し、その上面が水田として使用されていたと判断した湿地内堆積土下層の掘り下げから始めた。この作業を中央部に進めた結果、調査区全体の 1/3 程度では、それより以西の遺構面に比して 30 ~ 40cm程下る低地で遺構面を検出した。この東部の低地が湿地となっていたようだ。西側微高地と東側低地の段上の肩部は、初期の検出時にはほぼ直線的であり、肩部北部は西側からの褐色系の泥砂土と灰白色の粘土ブロックの混在土で整地し、形成されたと見られた。段の下る東側の低地側の遺構面では、東壁近くで数条の溝状を呈する遺構や柱穴と見られるピット、及び段上の肩沿いの中~南部では、肩部に沿うような溝状となる可能性がある土の違いが検出された。なお、この溝状遺構の西へ少し蛇行する北への延びは、先の混在土整地土の掘り下げ作業を待たなければならなかった。肩部より東側の低地で検出した各種遺構の年代は、検出作業中の出土遺物の年代から、長岡京期から中世に渡るものと判断された。柱穴と推定した遺構は、調査の進展により長岡京期の建物 2・3 と確認出来た。肩沿いの溝状遺構も蛇行しながら北北西から東南東へ延びており、長岡京期に機能を残していた流路 1 上層部と明らかになった。

遺構面検出作業は、高み側の中央部から西部へと進めた。西半部の高みの内では、中央部あたりが若干高めであり、検出された遺構も中世と見られる溝や溝状遺構が主体であった。

中央部より西側の遺構面は緩く下がり、西部の南半では、一辺が1.1mを超える大きな隅丸方形に近い平面形状を呈する長岡京期の柱穴群を、調査初期で既に7基確認出来た。追跡の結果では、東西5間、南北2間の東西棟の身舎となる大型の柱穴を計14基検出し、加えて北東辺の北側で、北庇となる少し小振りの柱穴を2基検出した。後に建物1として調査を進め



第4図 調査地全景と調査区設定 北西から

た南庇の柱穴は、調査の最終段階で安全対策の調査区南壁沿いの犬走りを掘り下げた結果検出出来た。これらの建物柱穴は、木質部も少し残る柱当たりの明瞭なものがほとんどであった。

西部全体では、遺構面が西に向かって徐々に低くなっており、この主たる原因は、中世段階の 採土と見られる薄く広い掘削に加えて、西壁近辺を中心に近現代の機械力による掘削が、かなり 広い範囲で加わった結果であると考えられる。このため西部全域では長岡京期の遺構を切って、 密度は低いが平安時代後期から中世の溝あるいは溝状遺構が検出され、西壁沿いの西辺部では中 世の遺構を切って、コンクリート片まで入った近現代の掘り込み遺構が検出された。これらの遺 構を調査手順に従って、新しい側から掘り下げ調査とその記録作業を進めた。

長岡京期の大きな建物1の東辺は、調査区中央部の西辺にまで延びており、東庇の柱穴も意識された。しかし、検出作業は調査手順通り、直交して交差する竹を使った暗渠と判明した中世の溝状遺構の調査と、そのベースであった中世の整地土層の掘り下げを終了してからとなった。この整地土層直下で検出した長岡京期から少し平安時代に幅のあると見た遺構面では、建物1の東庇の柱穴は検出出来なかった。さらに西庇も検出出来なかった結果、建物1は南北2面庇の建物であることがほぼ明らかとなった。

2月後半段階で、東部低地側において建物 2・3 の調査も進み、肩沿いの流路 1 上層部も長岡京期に機能が残っていたことも明らかとなった。長岡京期には正殿と見られる東西棟建物 1 と、東脇殿と見られる南北棟建物 2・3 の間に、流路 1 が南流していたようである。この段階で長岡京期の平面調査は終了し、後は柱穴個々の記録、及び建物 1 では南庇の柱穴を追跡し検出している。

2月末段階では、調査区東部の低みを中心に長岡京期以前の遺構の調査を開始したが、3月2日には長岡京期の遺構の主要部を残した状態で現地説明会を実施しており、交通が不便な地であったにもかかわらず、70名程の見学者を得ている。長岡京期の邸宅跡には市民の関心もかなり高かったようだ。現地説明会終了後には、長岡京期以前の遺構の掘り下げ調査を本格化した。

長岡京期以前の遺構の調査は、調査区東部の流路 1・2 が主である。流路 1 は土器の少ない中層の掘り下げ、さらに下層から最下層へと掘り下げ調査を進めた。下層以下では、少量の木片と多くの土器片が出土した。出土土器から流路 1 は、弥生時代中期に遡る可能性が明らかとなった。

流路1の東側の低地中心部では、断割りトレンチ状の掘削域を限定した掘り下げ調査ではあったが、幅5mを超える大型の流路2を検出した。検出部の南辺となる調査区南壁際では、流路に直交する形で設置された柵(しがらみ)が検出された。出土遺物は土器よりも木質遺物が多かったが、流路1と並存して機能していたことが把握出来た。流路2は、柵によるダムアップ機能も整備された耕作用の用水施設と理解された。ただ、流路2はかなり早く弥生時代の内に、その機能が失われる可能性も把握出来た。

長岡京期以前の調査も大きい成果はあったが、3月中旬頃が調査終了予定であったため、3月 11日には調査実務の現場作業を終了した。調査区の埋め戻しは、一部3月9日から段取りを始めて、3月11日から15日で終了し、現場資材の撤収も完了した。

### 3. 調查日誌抄

#### ■ 2018 年

12月4日(火)晴 現場事務所設営

12月5日(水)晴

測量基準点敷設、調査区設定

12月10日(月) 晴 資材等搬入

12月11日(火) 晴のち夜雨 表土層の機械掘削作業開始

12月12日(水)・13日(木)曇のち晴・晴れ機械掘削作業、調査区壁整形

12月14日(金)晴

機械掘削作業、調査区壁整形 一部で遺構面検出作業

12月15日(土)晴

機械掘削作業、遺構面検出作業

12月16日(日)

休み

12月17日(月)・18(火)晴

機械掘削及び壁面整形、遺構面検出作業

12月19日(水)曇

機械掘削及び壁面整形、遺構面検出作業 調査区内グリッド割付け

12月20日(木)曇一時雨

機械掘削終了、壁面整形と遺構面検出作業

12月21日(金)晴

壁面整形及び遺構面検出作業進める

12月22日(土)~24日(月)

12月25日(火)曇時々晴

ベルトコンベア設置

北東部から北西部の壁面整形及び遺構検出作業

12月26日(水)晴

調査区の壁面整形終了、遺構面検出作業続ける 【京都市検査立会い】

12月27日(木)晴

北西部の遺構面検出作業、中世溝状遺構など検出

12月28日(金)晴



第5図 機械掘削南壁沿い西進 東から



第6図 溝1・2の掘り下げ調査作業風景 北から



第7図 長岡京期建物1他検出作業風景 南西から

主に南西部で遺構面検出作業、長岡京期と見られる建物柱穴数基確認

12月29日(土)~31日(月) 休み

### ■ 2019 年

**1月1日(火)~6日(日)** 休み

1月7日(月)晴

ベルコンを組み直し、遺構面検出作業 南西部の建物 1 柱穴検出進める 【京都市検査立会い】

1月8日(火)晴

遺構検出作業、建物1及び北東湿地で溝他検出

1月9日(水)晴

遺構検出、建物1柱穴7基を検出、柱穴掘方 1.1×1.2m程の大型柱当たりも確認 平行して試掘坑や中世溝の掘り下げも開始する

1月10日(木)晴

建物1の柱穴追跡、試掘坑、中世溝の掘り下げ

1月11日(金)曇時々晴

南西部で建物他の遺構検出、東部で中世溝など掘 り下げ進める

1月12日(土)~14日(月)

1月15日(火)曇時々雨

現場作業雨で断続的となる

### 1月16日(水)晴

遺構面清掃、東から遺構(第1面)検出状況の撮 影目指す 【京都市検査立会い】

### 1月17日(木)晴

全力で遺構面の清掃続ける、順次ベルコン移動

### 1月18日(金)晴

遺構検出状況全景写真、検出遺構の平面図作成

## 1月19日(土)・20日(日)

休み

### 1月21日(月)曇のち晴

調査区西側部分、遺構検出及び精査で建物1など 追跡

### 1月22日(火)晴

ベルコン 15 台フルで再設置、中世の小溝群など の掘り下げ調査を本格化

#### 1月23日(水)晴

中世小溝群などの掘り下げ調査進める、東部で建物2の検出作業

### 1月24日(木)晴

中央部の小溝群は竹を埋設した暗渠と判明、この 暗渠は東西・南北で格子状を呈する

### 1月25日(金)晴

建物 1·2、中世小溝群の全景写真撮影後、測量実 測平面図作成

### 1月26日(土)・27日(日)

休み

### 1月28日(月)晴のち曇

中世小溝群の完掘、暗渠の竹材などの調査、記録

### 1月29日(火)晴



第8図 建物1南庇検出を目的とした掘り下げ調査



第9図 建物1柱穴掘り下げ調査 南東から



第10図 建物2・3柱穴掘り下げ調査風景 北から

暗渠他、中世小溝群の掘り下げ調査及び記録をほ ぼ終了する、ベルコン調整

#### 1月30日(水)晴

東部の段下低地部で南北溝群の掘り下げ調査進める、中央の段上で小溝群のベース土層(平安以降)の掘り下げ

### 1月31日(木)雨

現場作業中止

### 2月1日(金)曇のち晴

中央部から低地北東にかけて平安~中世の整地 層の掘り下げ作業

### 2月2日(土)・3日(日)

休み

### 2月4日(月)曇のち晴

東部低地側中心に排水処理に手間取る、調査区中央部から東北部の整地層の掘り下げ及び精査

### 2月5日(火)晴・6日(水)雨のち晴

継続している整地土の掘り下げと検出面の精査

### 2月7日(木)晴

中央南半で長岡京期の遺構面検出、建物 1 は東へ 展開せず

### 2月8日(金)晴のち曇

中央高み肩沿いに検出した流路1上層の掘り下 げ、建物1の柱穴掘り下げ及び庇などの柱穴追跡

### 2月9日(土)晴

主に流路 1、建物 1 の掘り下げ調査進める、建物 2・3 の柱穴追跡

### 2月10日(日)・11日(月)

休み



第11図 流路1掘り下げ調査風景 北から

### 2月12日(火)曇のち晴

建物1の柱穴掘方の掘り下げ調査、建物2・3の 柱穴追跡検出

### 2月13日(水)晴

建物1の柱穴掘方の掘り下げ柱当たり検出、建物2・3柱穴、流路1の掘り下げ調査、全景撮影用の清掃始める

### 2月14日(木)晴

建物1~3、流路1など長岡京期の遺構全景撮影 用清掃進める

#### 2月15日(金)晴

全景用清掃完了し、長岡京期の遺構全景撮影

### 2月16日(土)・17日(日)

休み

### 2月18日(月)晴

長岡京期の遺構、測量実測、建物 1 ~ 3 掘方、中・ 下層の掘下げ

### 2月19日(火)雨

現場作業中止

### 2月20日(水)晴雲多い

建物 1 南庇、南壁一部拡張追跡 建物 2・3 柱穴測量

### 2月21日(木)晴雲多い

建物 1 身舍柱穴掘方、南庇柱穴追跡

### 2月22日(金)晴雲多い

建物 1・南庇柱穴 6 基とも検出及び掘り下げ調査、 流路 1 掘り下げ 【京都市検査立会い】

### 2月23日(土)・24日(日)

休み

### 2月25日(月)晴

建物1~3掘方断面記録、2・3は記録後完掘

### 2月26日(火)晴

建物 2・3 柱穴完掘、完掘後写真及び実測補測、 流路 1 の掘り下げ調査進める

### 2月27日(水) 晴

建物1身舎、南北庇、柱穴掘り下げ調査、個別記録

### 2月28日(木)雨

記者発表

### 3月1日(金)晴

調査区内排水作業後、建物 1 柱穴掘り下げ調査

### 3月2日(土)晴



第12図 現地説明会風景 北東から



第13図 流路1・2柵(しがらみ) 掘り下げ調査 南から



第14図 流路2柵(しがらみ)掘り下げ調査 北東から

午前:建物1柱穴掘り下げ調査完了後、清掃 建物1柱穴個別・全景撮影

午後:1時から現地説明会開催(来場者70余名)

### 3月3日(日)

休み

### 3月4日(月)雨のち曇

建物 1 掘方及び柱根完掘と記録進める 流路 2 の掘り下げ調査

### 3月5日(火)晴

流路2の掘り下げ、南壁近くで柵(しがらみ) 検出調査

### 3月6日(水)~8日(金)

流路2掘り下げ及び柵の調査を進める

### 3月9日(土) 晴

流路 2、柵を残しほぼ完掘、柵検出状況及び 流路 1・2 を中心にした調査区東半部の弥生時代 遺構全景撮影後、平面図、柵側面図、調査区壁面 土層図などの記録

### 3月10日(日)曇のち雨

測量実測の残務作業実施

### 3月11日(月)曇

流路2木質遺物、流木などサンプル採取、調査区壁面で基本層序など点検後、測量実測 本日で調査実務終了し、埋め戻し作業開始

### 3月12日(火)~14日(木)

埋め戻し作業継続、資材整理

### 3月15日(金)晴

埋め戻し作業及び地表面整地完了し、現場資材撤収

# 第2章 位置と環境

### 1. 地理と歴史的環境

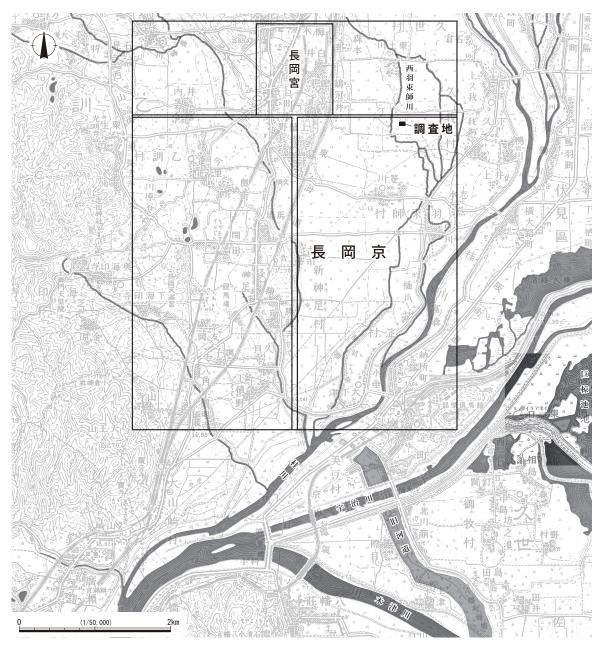
旧乙訓郡域は、京都盆地の南西部にあって、東辺から南端を南流する桂川までに限られており、西辺を限る西山沿いに連なって、南端へ収束する東西2辺の長い三角形状を呈した狭い小地域である。旧乙訓郡域の北限は、旧山陰道、現在の国道9号線が西の亀岡へと抜ける樫原あたりである。細かく見ると郡域北部は、桂川が西へ大きく振れて、嵯峨野北西部の京都盆地への流出口に至るので、北東角が取れたように狭くなる。この乙訓郡域にあっては、基本的には北部から南部への下りはやや緩やかである。しかし、西山から東の桂川方向への下りは、幅が狭いにもかかわらず急激で、中南部では郡域の中程から以東は、桂川沿いの低地帯となる。この低地帯は、巨椋池周辺の低地帯の一部でもあり、非日常的増水時には巨椋池の一角を占める。

今回の調査地は、乙訓郡域の中位北半の桂川沿いの低地帯側に位置している。現在の京阪セロファン工場建設用の 2m 程もある積み土の基礎土層下でも検出される水田面や、現在も使用が続いている周辺水田面の海抜は 11.5m 前後である。盆地で最も低いとされる、三川合流部のある八幡市域の中位ぐらいの水田面の海抜高と、大きな差はない。元々人々の居住には不向きな低地帯だが、逆に水田耕作には適した低地帯ではあったようで、近年あるいは現在も長い水田的土地利用の余韻を残す未開発の水田地が多く残っている。

旧乙訓郡域の旧石器時代から縄文時代後期頃までの遺跡は不鮮明なため、基本的には今回は置いておく。しかし、稲作を伴う弥生文化の地域への伝播と定着は、地域社会形成の大きな画期の一つであるので、若干なりとも触れた上で話を進めていく。

京都市西京区となる郡域北西部の高い扇状地帯である大原野において、京都市の調査によって縄文時代晩期に比定された竪穴住居跡から炭化米が出土し注目された。このことは、山際のやや高い地域に縄文時代晩期の人々が定住生活を営んでいた頃に、弥生時代前期の人々が、西日本では集落を作り、稲作を開始していたことを示していると理解して良いだろうが、縄文時代晩期の人々もそうした新しい文化に総体として巻き込まれていたのか、米など必要品だけを手に入れていたのかは明らかではない。しかし、縄文時代晩期に弥生人と弥生文化が進出し、列島各地へ広がっていったことは歴史的事実であろう。

京都盆地内の最も古い弥生時代前期の集落は、調査地から 2km程南のやや西の地において、学史的にも知られ、一般的にも古くから著名な雲ノ宮遺跡で発見された。この集落は環濠を持ち、京都盆地へ進出してきた弥生人が、最初に定着して生活を営んだ集落である。桂川を挟んだ対岸の下鳥羽でも同時期の集落が発見されている。このような弥生時代の最初期集落は、巨椋池周辺の低地帯の肩的な位置を占めている、海抜 14m 前後の微高地上に営まれるようである。雲ノ宮では遺跡の東側となる海抜 10~ 12m 程の湿地帯的低地は、当初から水田耕作地として利用され



第15図 長岡京域位置図〔昭和7年長岡京・淀 部分修正〕

ていたものと見て良いだろう。下鳥羽遺跡も巨椋池北岸の少し北に位置しており、同様の土地条件を備えている。

この海抜 14m の等高線ラインは、乙訓地域では雲ノ宮遺跡から少し東へ振りながら北へと延び、調査地周辺では少し西側を走る。調査地の西側一帯は、弥生時代中期頃には少し南の鶏冠井清水遺跡が、そのすぐ北隣には同中期以降に展開する鶏冠井遺跡が、さらその少し東の北隣には、少し遅れるようだが、中期からの東土川遺跡が展開している。乙訓地域の弥生文化の広がりは、弥生時代前半期はこの海抜 14m の等高線に沿って北部へ進出していくようだが、巨椋池周辺の低湿地岸を足掛かりとして広がっていくようにも見え、母村クラス集落の展開の一様とも見える。低湿地帯は、時代を通して水田的土地利用が基本であったと見て良いだろう。

上述のような土地利用は、常に自然堤防も含めた微高地側に集落、近接低湿地側は水田的利用

という基本形は、古墳時代から古代前期の奈良時代まで発展的に継続してきたと見て大過ないだろう。山際に寺がいくつか建っていたとされているこの地域は、律令国家成立初期に弟国郡として山背国に、ひいては日本国の畿内に組み込まれることになる。しかし、乙訓の中~南部の東半となるこの地域の状況は、奈良時代にあっても基本は農村集落を主体とする、いわゆる鄙の地であったと理解すべきだろう。

奈良時代末期に当地域にとっては、突然に長岡京が遷都されてくる。どのように考えても地域にとっては、晴天の霹靂とも言うべき事態である。その上、狭い乙訓郡域にフルサイズの長岡京は押し込められない。現在の地形図に平安京に匹敵するサイズの推定長岡京をはめると、造作不可能な地域がかなり広いことがわかる。山地に掛かる右京四坊ベルトや、桂川と以東の低地が広がる左京南東部は、京都市の調査でも長岡京期の遺構は造られていなかった地域がかなり広がることが確認されている。加えて朱雀門や羅城門も遺構の確認は出来ないので、造られていなかったと見て良いだろう。

このような未完を前提とした都と見て良い推定長岡京において、当調査地は左京三条三坊十六町内に位置することとなる。同十六町は二条大路に面し、二条大路より北部の宮城東面街区と隣接する一等地とも言える街区である。昭和時代には、伝統的な低地が中心の三坊以東は、遺跡の発見が疑われていた。しかし、平成に入って以降の低地帯の再開発に伴う行政的発掘調査の成果によって、この地帯もかなりの密度で宅地的土地利用が進んでいたことが明らかとなってきた。その象徴が左京北一条三坊二・三町で発見された、平安京への引っ越し用にしては立派過ぎる仮宮殿である桓武天皇の東院である。当調査地の位置する三条三坊や東の四坊でも、近年邸宅の発見が続いている。低湿地的土地条件に反して、平安京左京四条以北などと比べるとかなり利用密度は低いが、当地域を含む長岡京の左京四条以北も、一定レベルの都市的景観を呈する程になっていたと見ることが出来そうである。

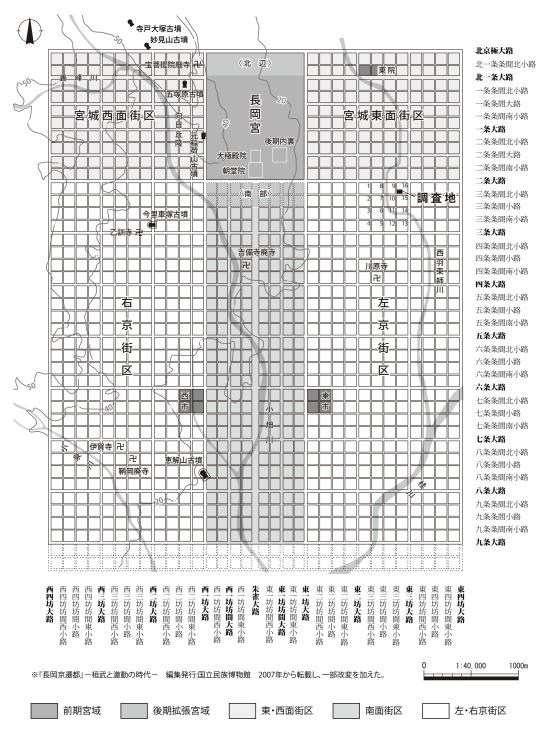
しかし、この調査成果の理解には十分な注意が必要であると思う。この地域の邸宅群が、長岡京期の内のいつ頃に建てられ、いつ廃棄されていったのかという、考古的情報にとっては基本的な課題に取り組んで答えを出す必要がある。土器だけでは断定的理解が難しい、時間レベルの答えが求められる。この地域の都市化は建都初期からなのか、東院と同様に平安京への引っ越し直前に急造されたものなのか、この辺の理解によっては長岡京の歴史像が大きく変わるとも考えられる。今回の調査でも、微妙な課題に答えを出す注意深い調査が必要となるだろう。

この地域の既往調査成果を見ている限りでは、この地域の長岡京期の邸宅跡を含む遺構群は、一部を除くと平安京への遷都直後に急速に廃絶していくと見られる。この地域の長岡京期の遺跡は、長岡京廃都後には直ぐに、弥生時代以来の伝統的とも言える土地利用形態である水田稲作地帯に戻ると理解される。当地の調査でも追認する方向の成果を得ている。

古代後半の平安時代以降・中世・近世の集落は、地域内の周辺微高地上に定着的に継続しながら緩やかな発展を遂げ、大きな変化を経ず戦後にまで至る。山城の乙訓地域の低湿地部に、弥生時代以来から昭和時代にまで残った、京近郊の伝統的景観にもなっていた田園風景は、まさに平

成、令和の時代に消滅的激変期を迎えている。記録保存を目的とした遺跡の発掘調査の重要性と 必要性は、今までよりも大きく増している。

左京四条以北から宮城東面街区の一条近くまでの既往調査成果は、次の既往の調査の項で略述 しておく。



第16 図 長岡京条坊図

### 2. 既往の調査

L435 他 左京北一条三坊二・三町では数次に渡り調査され、この地域が東院であることを示す 墨書土器や木簡が出土している。

L329・384 他 左京二条三坊十五町では造長岡京宮使を務めた参議正三位佐伯宿禰今毛人の邸宅と推察されている。検出遺構は掘立柱建物跡 9 棟がある。

L336 左京二条四坊二町 (左京 336 次調査) は南に二条条間大路、西に東三坊大路が位置し、掘立柱建物跡 7 棟を検出している。

L303 他 左京二条三・四坊では二条条間大路が広範囲で検出され、東四坊坊間西小路まで明確になった。

L337・385 左京二条四坊七町 (左京 337・385 次調査) では、掘立柱建物跡 9 棟を検出。その主屋と見られる SB385511 は北・東・南に庇を持っている。

**L22・324 他** 左京 22 次、324 次などの数次の調査により左京三条二坊八町では、掘立柱建物跡 や溝などが検出され、大政官坊厨家と推定されている。

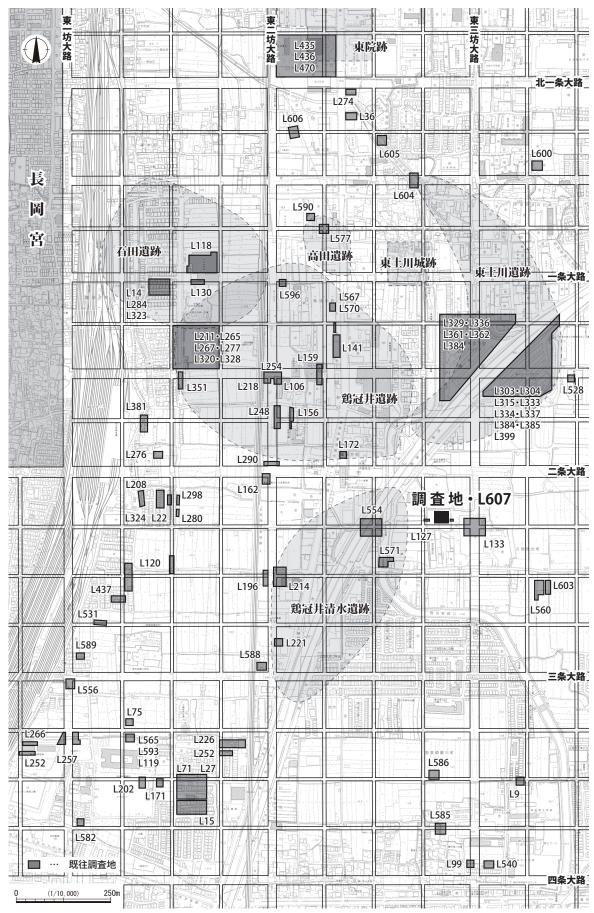
L554 長岡京左京 554 次調査では長岡京期の東三坊坊間東小路・三条条間北小路などを検出した。特に東三坊坊間東小路を貫き南に流れている。後者の南側溝は西側溝に行き止まり、東三坊坊間東小路を貫かない交差点になっており、「条坊型」であることが明確になった

L120 左京三条二坊三町・三条条間南大路では左京第 120 次調査で三条条間小路、東二条坊間 西小路の部分で掘立柱建物跡二棟、井戸 2 基を検出している。

L437 左京 437 次調査では、東二坊坊間西小路両側溝、六町域では両面庇付掘立柱建物跡 1 棟、南北溝 1 条を検出。三町域では掘立柱建物跡 5 棟、柵 3 条、門 1 棟、南北溝群、東西溝整地跡などの多くの遺構を検出している。

L560 560 次調査では、左京三条四坊六町の北西部を占め、長岡京期の掘立柱建物跡 5 棟、柱列 2 条、東西溝 2 条を検出している。その中でも建物 1 は身舎 5 間× 2 間で南北に庇が付いている。 建物 2 も身舎 5 間× 2 間であるが、庇は南側に付いているだけであり、調査結果から建物 1 が正殿、 建物 2 を後殿としている。

宮城東面街区を含む左京北部は、このように近年の発掘調査件数の増加によって、三坊以東は低湿地帯であるが、旧来の予想を覆すに足る程に宅地的土地利用が進んでいたようである。しかし、平安京左京北部と比べると利用密度は高くはなく、平安京右京に近似したレベルであったようである。



第17図 長岡京左京北部の既往調査位置図

### 【参考文献】

福山敏男・中山修一・高橋徹・浪貝毅 「長岡京発掘」NHK ブックス 74 1968 年

平良泰久 「京都府「馬」出土一覧」『京都考古第1号』京都考古刊行会 1974年

海老瀬敏正 「土馬の新資料〈長岡京跡出土〉『京都考古第6号』京考古刊行会 1975年

高橋美久二 「長岡京左京三条二坊の調査『京都考古第11号』京考古刊行会 1975年

「昭和48・49年度の調査『京都考古第17号』京考古刊行会 1975年

中山修一・平尾政幸・梅川光隆 「長岡京跡発掘調査報告―京都市立小学校分校・中学校分校新設に伴う調査―」

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1977年

『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻平凡社 1979年

戸原和人 「長岡京跡左京第18次調査概要―左京六条二坊七町・雲宮遺跡」

『長岡京市文化財調査報告第5冊』 長岡京市教育委員会 1980年

清水みき 「長岡京造営論―二つの画期をめぐって―」『ヒストリア 110』大阪歴史学会 1986 年

鈴木廣司・長宗繁一 「長岡京左京三条三・四坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1985年

「長岡京左京二・三条三・四坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財概要』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1987年

「長岡京左京二条三・四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1988 年

井上和人 「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報第 41 冊 1984 年

「都城の定型化」『季刊考古学』第22号雄山閣 1988年

太田静六 『寝殿造の研究』(株)吉川弘文館 1987年

京都市編 『史料京都の歴史 16 伏見区』平凡社 1991 年

木村泰彦・小田桐淳 「長岡京時代」『長岡京市史』資料編 長岡京市役所 1991年

山中章 「古代条坊制論」『考古学研究』第38号巻第4号 1992年

山中章・清水みき 「長岡京木簡二解説」向日市埋蔵文化財調査報告書

(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1993年

小林清 『長岡京の新研究全』比叡書房 1995年

長宗繁一・木村保明他 「水垂遺跡長岡京左京六・七条三坊」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第 17 冊

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年

野島永 「長岡京の大規模宅地―名神桂川パーキング、エリアの調査からー」

『京都府埋蔵文化財情報』第68号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998年

岩松保 「長岡京の完成度、長岡京左京二条三・四坊・東土川遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第 28 冊

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000 年

平良泰久、他 「長岡京左京二条三・四坊・東土川遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第28冊

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年

山中章・梅本康広・藤井整 「長岡京左京二条二坊十町」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第56 (財) 向日市埋蔵文化財センター 2003年

丸川義広 「長岡京左京一条四坊十二町」『京都市埋蔵文化財研究都市埋蔵文化財研究所 2006年

梅本康広・佐藤直子・辻本裕也 「長岡京左京第499次一, 二条大路」

『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2008-1(財)京都市埋蔵文化財研究 2009年

岩松保 「条坊制の変遷」遺跡でたどる京都の歴史 5 長岡京期の京都『京都府埋蔵文化財情報』第 108 号 2009 年

山中章・國下多美樹 「長岡京・東土川西遺跡・修理式遺跡」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』

長岡京跡発掘調査研究所(財)向日市埋蔵文化財センター 2009年 百瀬正恒・網伸也 「長岡京右京一条四坊十三・十四町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-2』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 2003 年

加納敬二・津々池惣一 「長岡京左京二条四坊六・七町」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-1』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 2009 年 布川豊治 「長岡京左京三条四坊十・十一町」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-16』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 2009 年

國下多美樹 『長岡京の歴史考古学研究』吉川弘文館 2013年

小松武彦・モンペティ恭代・辻裕司 「長岡京左京三条四坊六町」『京都市埋蔵文化財研究所発掘報告 2013-13』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 2013年

辻裕司 「長岡京左京三条三坊十町・鶏冠井清水遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘報告 2012-19』

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 2013年

布川豊治・伊藤潔 「長岡京左京二条四坊五・十二町」『京都市埋蔵文化財研究所発掘報告 2014-5』

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所 2014年

東洋一 『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡跡』京都市埋蔵文化財研究所報告

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所 2014年

# 第3章 調查成果

### 1. 基本層序 (第18図)

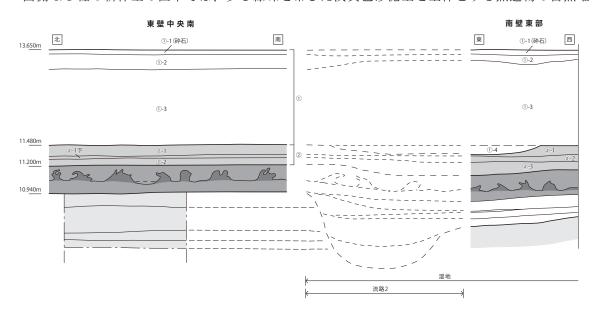
調査区は、東西 40 m×南北 28 mの 1120㎡とかなり広いが、基本層序はほぼ全域で共通する。 第①層としてまとめた土層は、汚れた褐色から灰色を呈する厚さ 2.2m 前後の現代積土であり、 全体に改良剤を混ぜて積み上げているので、非常に堅く締まっている。①層で主体を成す①-3 とした積土は重機によって、南、東、西方から順次入れ土されたようである。

この内①-1・2層は砕石を主とする土層で、現地表面を直接形成しておりよく締まっている。 ①-4 は重機で掘削された浅い凹に入った①-3の類似土である。積土①層は、当地が京阪セロファン工場の敷地となった以降に、工場建設を予定した積土による大規模な整地土層と解される。

②層にまとめた土層は、古代後半から中世、近世、近代、現代に至る長い時間幅を持つ、水田を主としたと見られる耕作土層である。工場建設直前まで生きていた、いわゆるあま土(稲を直接植えるため水を入れた耕作土)と田の基礎土層である床土(上面をほぼ水平に成形し、その上にあま土を敷く)で田を構成する。あま土は暗茶灰色の黒っぽい泥土層であり、床土は褐色から少し茶味を帯びた部分もある。粘質の泥土が主体を成す)

調査区内では東側 1/3 程が、それより以西に比べると  $20 \sim 30$  cm 程低くなる。東側 1/3 程は地山を肩に成立していた流路を持つ、湿地状を呈する低地側に位置していると見られる。この付近は、近代まで地境が維持されていた可能性があるようだ。なお水田の耕作土は、客土も加えて造り直しが幾度も行われたと見られるので、全体的には薄めの②層であるが、先に記したように古代から近・現代までの長い時間幅の中に位置付けて理解しておく。

西側 1/3 程の耕作土の直下では、少し緑味を帯びた淡黄色砂泥土を主体とする無遺物の自然堆



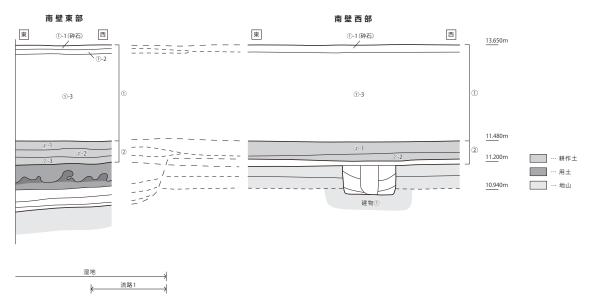
積土のいわゆる地山が検出される。中央部の 1/3 程では地山を用土としたと見られる淡黄褐色砂泥土の 10 ~ 15cm程の整地土層が分布する所が多い。土面では節を抜いた竹筒を用いた暗渠が、南北・東西で格子目状を呈して設置されていた。形成時期は中世以降から近世である。

東側の 1/3 強は、下部に重なる流路や湿地帯に重なっており、湿地全体に入れ土をして耕作地の再構築を行なったようである。湿地帯の上層部は淡黄灰色から灰白色を呈する粘質土が、大きなブロックで入れられた湿地の埋土土層である。このまだら土に見える埋土は、湿地帯の北西部に厚めに広がり、埋土は中世に入ってからであろう。この埋土が入った後は、湿地埋土と流路の肩より西側との落差は、20~30cm程にまで小さくなる。

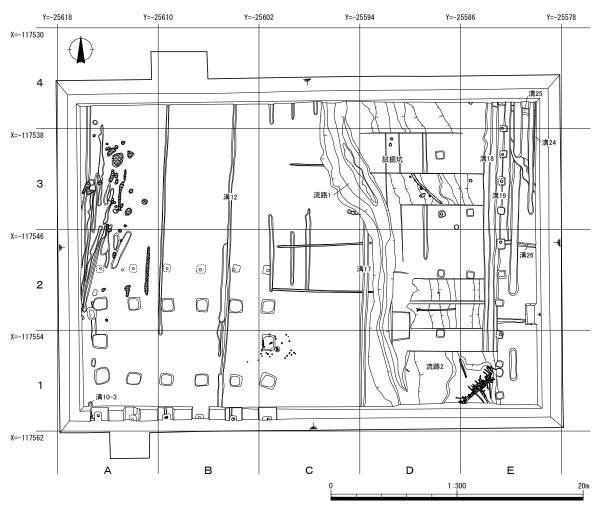
埋め土を排土すると、調査区の 1/3 程を占める湿地帯のほぼ全域に、遺物を含む暗茶褐色泥土 (粘質)が広く堆積する。上層から上面には人間の手が加えられていると見られ、湿地帯は古代 以前にすでに水田的土地利用が成されていたと推測される。なおこの土層は合わせて 50 ~ 60m 程になる。下層部上面は長岡京期の一時期に宅地化するがすぐにまた耕作地へと戻る。

この湿地の堆積土下には、北西から南東流する西側の(小)流路1と、それにほぼ並走する流路2が検出される。流路1は先の暗茶褐色泥土、上層段階まで機能していたと見ており、長岡京期にまで機能が維持された可能性があると見ている。しかし、流路2は同層の下層以下で機能していたと見られ、柵(しがらみ)も長岡京期には埋没していたものと見られる。

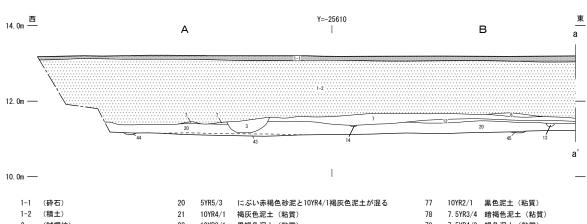
これらの湿地帯や流路状遺構中央部の西肩以西では、先述の中央整地土層下を含む地山直上面が長岡京期の遺構面となる。この遺構面は、断割り調査などから 1m 程下まで続き、砂質度と淡緑色~淡青色味が下層方向へと増していく。小河川によって形成された未発掘の自然堤防と見てよいだろう。旧を含め西羽束師川の流れの東側に形成された自然堤防と見ている。この見方からは、東側 1/3 で検出調査した流路 2 とその上部の湿地帯は再利用されているが、西羽束師川の旧流路の1つであり、それが後代に湿地状化して耕作地へと組み込まれて利用が続いたと考えられる。なお流路は、自然形成の部分に人工的に設置された用水路であった可能性を考えている。



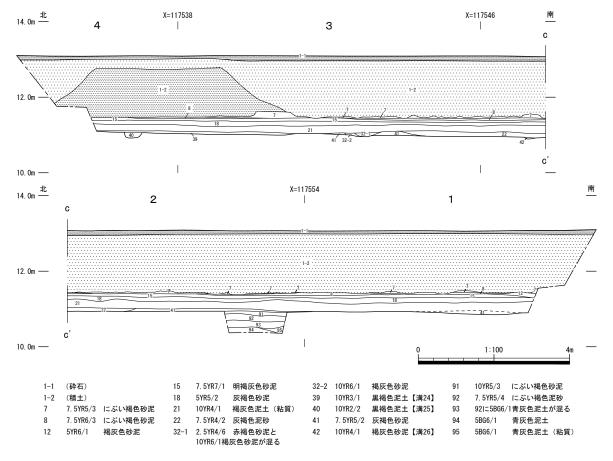
第 18 図 土層断面概念図



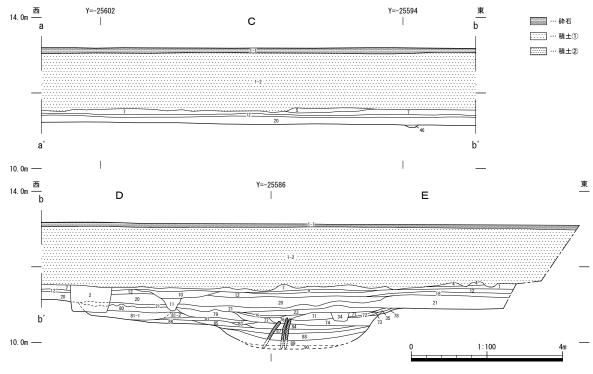
第19図 全遺構平面図



1-1	(砕石)		20	5YR5/3	にぶい赤褐色砂泥と10YR4/1褐灰色泥土が混る	77	10YR2/1	黒色泥土 (粘質)
1-2	(積土)		21	10YR4/1	褐灰色泥土 (粘質)	78	7.5YR3/4	暗褐色泥土(粘質)
2	(試掘坑)		23	10YR3/1	黒褐色泥土(粘質)	79	7. 5YR4/3	褐色泥土 (粘質)
3	10YR5/2	灰黄褐色砂泥	34	10YR3/1	黒褐色泥土【溝18】	80	10YR4/1	褐灰色泥土 (粘質)
4	2. 5YR6/1	黄灰色砂泥	35	10YR3/2	黒褐色泥土【溝19】	81-1	5YR4/3	にぶい赤褐色泥土(粘質)
5	7. 5YR5/1	褐灰色砂泥	43	7.5YR6/2	灰褐色砂泥	81-2	5YR4/4	にぶい赤褐色泥土(粘質)
6	7. 5YR6/1	褐灰色砂泥	44	10YR6/2	灰黄褐色砂泥【溝10-3】	82	10YR2/1	黒色泥土 (粘質)
7	7. 5YR5/3	にぶい褐色砂泥	45	10YR6/1	褐灰色砂泥【溝12】	83	10YR7/1	灰白色泥土~粘土(粘質)
9	5YR5/2	灰褐色砂泥	46	10YR5/1	褐灰色砂泥【溝17】	84	2.5Y2/1	黒色泥土 (粘質)
10	5YR5/3	にぶい赤褐色砂泥	71	10YR3/2	黒褐色泥土(粘質)	85	7. 5YR2/3	極暗褐色泥土(粘質)
11	5YR4/3	にぶい赤褐色砂泥	72	7. 5YR3/1	黒褐色泥土(粘質)	86	10YR2/1	黒色泥土 (粘質)
12	5YR6/1	褐灰色砂泥	73	7. 5YR3/3	暗褐色泥土 (粘質)	87	5Y2/1	黒色泥土 (粘質)
13	10YR5/1	褐灰色砂泥	74	7. 5YR2/1	黒色泥土 (粘質)	88	2.5Y3/1	黒褐色泥土(粘質)
14	10YR5/1	褐灰色砂泥	75	10YR3/2	黒褐色泥土 (粘質)	89	2.5Y2/1	黒色泥土 (粘質)
18	5YR5/2	灰褐色砂泥	76	7. 5YR3/2	黒褐色泥土(粘質)	90	2.5Y3/1	黒褐色泥土(粘質)



第20図 東壁土層断面図



第21図 南壁土層断面図

### 2. 遺 構

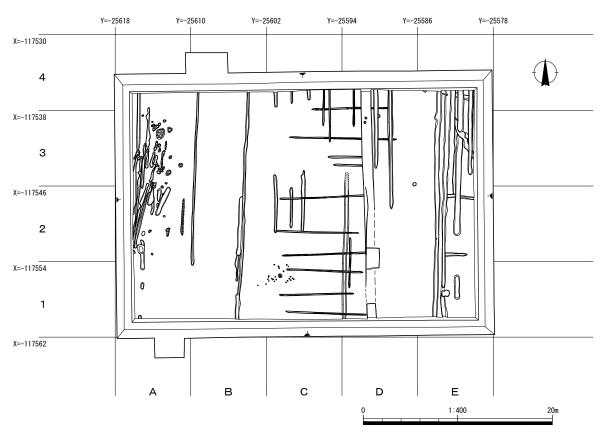
### (1) 遺構面と成立遺構 (第22図~第24図)

今回の発掘調査によって検出し掘り下げ調査した遺構は、大きく3時期にまとめられる。

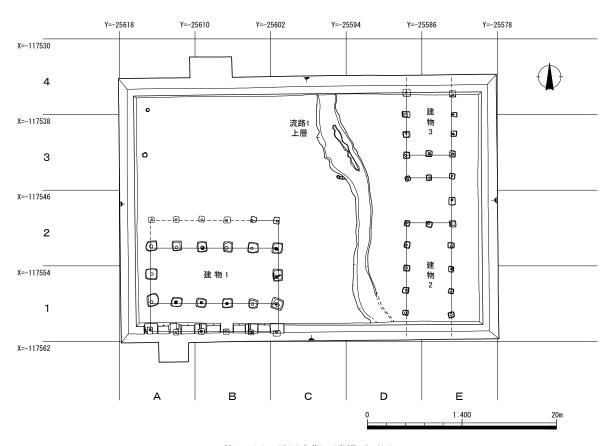
第 22 図に図化しているものは長岡京が廃絶して以降、長岡京期の遺構と同一面、あるいはその上に整備された平安時代以降の耕作用整地土層の上面に成立していた溝、及び溝状遺構(暗渠が多い)が主体である。湿気抜きあるいは保水を目的とした耕作関係の小溝群であろう。

第23図は、長岡京期の建物1~3の計3棟が成立している長岡京期の遺構面である。流路1 もこの頃まで利用されていたと見ている。この面の少し高い西側2/3程は、いわゆる未発達な自 然堤防状の微高地上面の凹凸を、平坦に削平して形成されたと見られる。東側1/3は、旧流路を 含む後背湿地的な低地がほぼ埋没した、西側より30cm程下がる平坦な低地である。

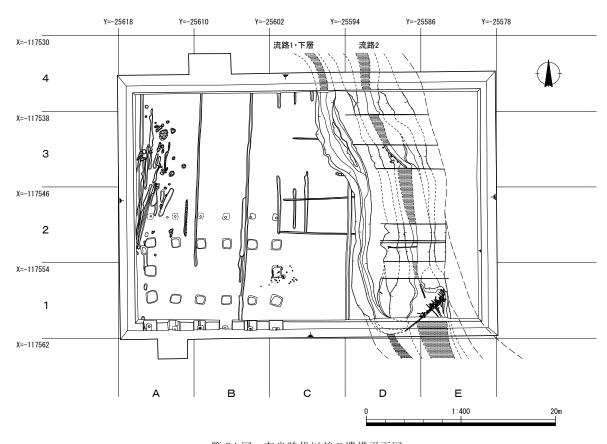
第24図は、削平を受けているがいわゆる地山直上の遺構面である。西側の自然堤防(2/3程)の東側に残った旧西羽束師川と、それを用水路化したと見られる流路2が、北北西から南南東へと南流している。また、西側の自然堤防の東辺沿いには、流路2の支線的用水路が既に整備されている。この流路が埋没してからは、湿地化した低地を利用した水田的土地利用が行われていたようだ。旧西羽束師川は周辺の既往調査成果も合わせると、成立は縄文晩期まで遡ると見られ、それ以降の弥生時代~古墳時代には柵(しがらみ)を設置して、用水路的な整備が加えられて利用が続くようだが、古代に入る頃には流路は埋没し、湿地化していたと見られる。



第22図 平安時代以後の遺構平面図



第23図 長岡京期の遺構平面図



第24図 奈良時代以前の遺構平面図

以下では、3時期にまとめられる遺構群を時期別に順次概説する。

### (2) 平安時代以後の遺構 (第25図~第28図)

平安時代以後の遺構は、小溝や小溝状遺構群が中心的なものである。これらの小溝群は、個々の規模や構造、また分布範囲によって大きく $I \sim V$ 群にまとめることが出来る。各群は設置目的や時期が共通しているとも見られる。I群は近現代、 $II \sim V$ 群は平安時代以降から鎌倉時代、及び室町時代の中世までの幅の内に位置付けられる。以下では、順次説明を進める。

#### Ⅰ群

この群は、西壁近くのA区列に主に展開している溝3~5·7~9を主体とする。

この溝群は他の群に比べて軸は東へ振れており、埋没土にはコンクリート片や塩化ビニール片を含んでいる。周辺には同様に、密集的に検出された溝状の土坑  $1\sim6$  やピット  $3\sim10$  などがあり、掘方形状は異なるが埋没土に共通性の見られるものが多い。このような検出状況から I 群は溝に限らず、共通する性格を持つ土坑・ピットも加えた遺構群とも見ることが出来る。

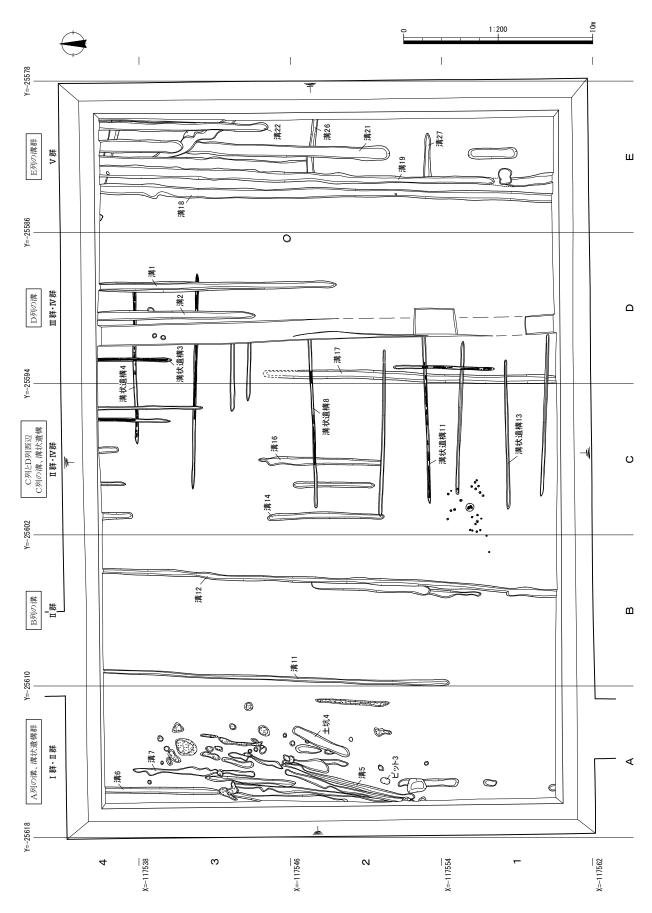
これら広義の意味でのI群遺構群は、埋没土の近現代遺物の混入状態からも、地山直上面で検出したものではあるが、近現代に入って後に機械掘削痕跡の残痕的な掘り込み痕跡群の理解が妥当と考えている。

#### Ⅱ群

この溝群は、南北方向に軸を持つ溝 6 と溝  $10 \sim 16$  の 8 条からなる。一定ではないが、溝幅は  $25 \sim 40$  cm 弱程であり、断面形状は浅い U 字状を呈する。構内堆積土は、褐灰褐色系の色調を持った砂粒を含む粘質砂泥土である。溝間の幅は、溝 12 以西は  $5 \sim 6$  m、以東は  $1.5 \sim 2$  m 程であり、調査区内では西 2/3 程の高みに展開している。方位的には各溝ともに、南北軸から東へ 3 度振って設置されている。溝間は広狭あるが、溝の構造や堆積土、方位の振りなど共通する要素が多く、同じ目的で同時期にまとめて設定されたものと見られる。溝 12 などからは、鎌倉時代頃の瓦器片が出土しており、中世前半に湿った状態の耕作地の湿気抜き的な機能を持って形成され、機能していたものと見られる。この頃の西側の微高地と低地となる東側の湿地では、肩あたりを境に所有者が異なっていたか、あるいは土地利用のあり方が違っていたのであろう。

### Ⅲ群

Ⅲ-1 群の溝 1・2 は、低地側にあり溝間が 1.2m 程で並走するが、南半には延びていないようである。堆積土はほぼ共通し、上部は湿地西肩北部を埋めていた土に類しているが、下層部は暗褐色系の粘質泥土であった。湿地埋没土より上位から湿地を切り込んで作られていた。瓦器片などの出土遺物から中世前半頃の成立との見方も出来るが、成立面からは中世後半期に、耕作地に



第25図 平安時代以後の遺構平面図

含む水分をやや低い南部へ排水する小溝として設置されたものと見ておく。

Ⅲ-2 群の溝 17 は、幅 42 ~ 50cm程であり、やはり U 字状の断面形状を持っている。堆積土は 淡褐色の砂泥土であり、出土遺物は古手混入品と見られる長岡京期の土器片のみである。他の小 溝とはやや異質な面を持っており、C・D 列に展開するIV群とした溝状遺構の中世ベース土層直 下の、長岡京期遺構面で検出している点も注意される。遺構形成が長岡京期、あるいは平安時代 前半期まで遡る可能性もあるが、大勢的判断から平安時代の内で形成された耕作関連の溝群の一 つと見ておく。

#### IV群

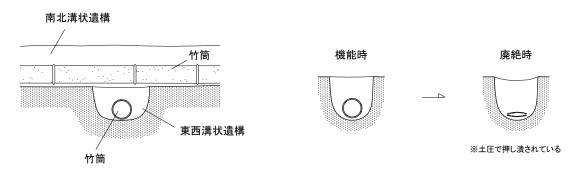
この溝状遺構群は、 $C \cdot D$ 列に展開しており、南北方向のものは途中で途切れて終了している。 溝状遺構  $1 \sim 3 \cdot 10$  の 4 条は、南北方向に軸を持ち、方位は 1 度程東へ振る。溝状遺構  $4 \sim 9 \cdot 11 \sim 14$  の計 10 条は、東西方向に軸を持ち、方位は南へ 1 度程振る。南北方向の溝状遺構と東西方向の溝状遺構は、直交的に設置されており、交差部の構造は南北が上位、東西が下位で交差していたが、並存的に機能していたものと見て良いだろう。

両方向の溝状遺構ともに幅 15~ 20cm程と狭く、深さは 20cm前後とやや深い U 字状を呈する 小溝である。東西南北の両方の小溝とも、底部近くで押しつぶされ二重となった竹筒が検出され ている。竹の節は抜かれており、本来は竹筒を円筒形のまま埋めて、水抜きの暗渠とした小溝と 見られる。東西方向のものは東へ、南北方向のものは南へ排水(または湿気抜き)していたもの と見ている。

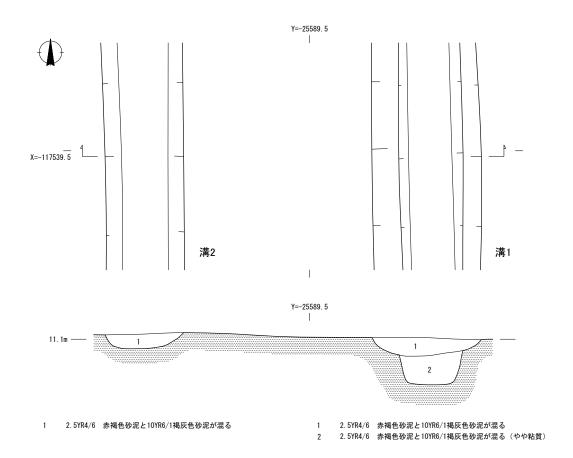
設置状況の構造などからも、両方向の検出している全ての溝状遺構は、並存して機能していた ものと理解される。時期的には、Ⅱ群などよりも中世整地層を挟む同層上面から成立しており、 加えて出土遺物も室町時代のものを含んでいる。これらの点からは、中世中頃以降の室町時代に 入ってから、形成され機能していたものと考えている。

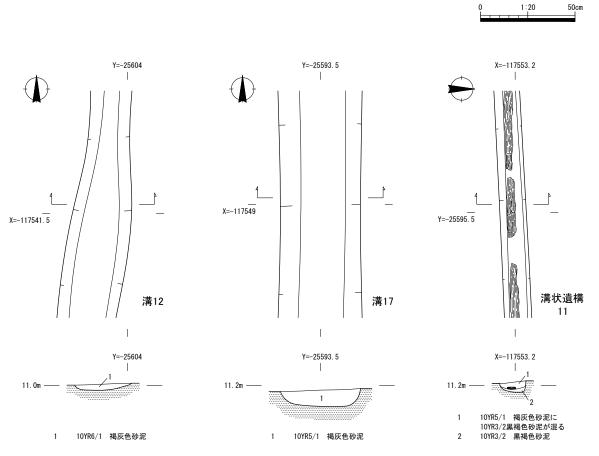
### V群

この群は、溝 18 ~ 25 の南北方向のものを中心とした 8 条の溝群であり、調査区東辺部の E 区列で検出している。この内溝 18・19・21 の 3 条は、調査区を南北に横断している。溝幅は 40 ~ 70cm程あり、西側の微高地上の溝群よりも規模が大きい。断面形状は偏平な U 字形であり、底部に凹凸を残すものも見られ、構内堆積土は暗茶褐色の粘質泥土が主体であった。溝 23・25

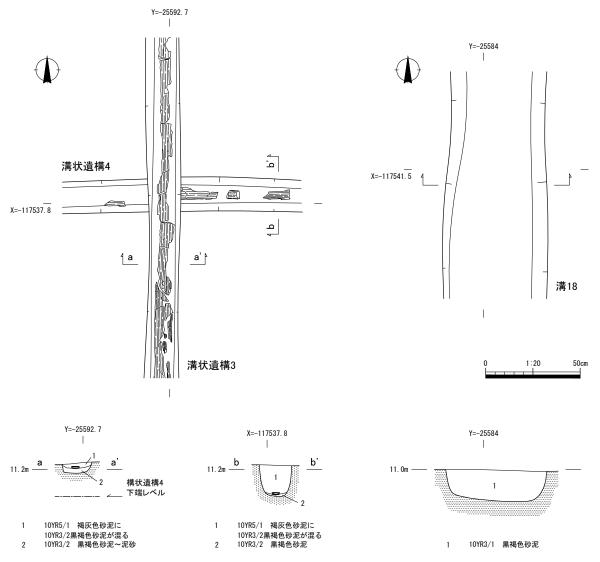


第26図 竹筒を用いた暗渠の模式図





第 27 図 溝 1・2・12・17 及び溝状遺構 11 平・断面図



第28図 溝18及び溝状遺構3・4平・断面図

は、北西から南東へ斜行し、南北溝に切られているようにも見えるが、堆積土はほぼ共通しており、並存していたと見ている。密集度や規模に違いはあるが、耕作関連の排水溝群であると見ており、実際には掘り直しがあり、並存数が少なかった可能性もあるだろう。

時期的には、長岡京期の遺物も古手混入的に多いが、溝 18 や 22 からは瓦器塊が出土している。 全体としては平安時代から鎌倉時代の内で設定され、機能していたものと考えている。

なお、東西方向の溝 26・27 に関して、埋没土は V 群のものに近似するが、成立時期は長岡京期に遡る可能性がある。遺構が切られて不明な点もあるため、 V 群に組み込んではいない。ここでは断定的理解は置いておく。

### (3) 長岡京期の遺構(第29図~第34図)

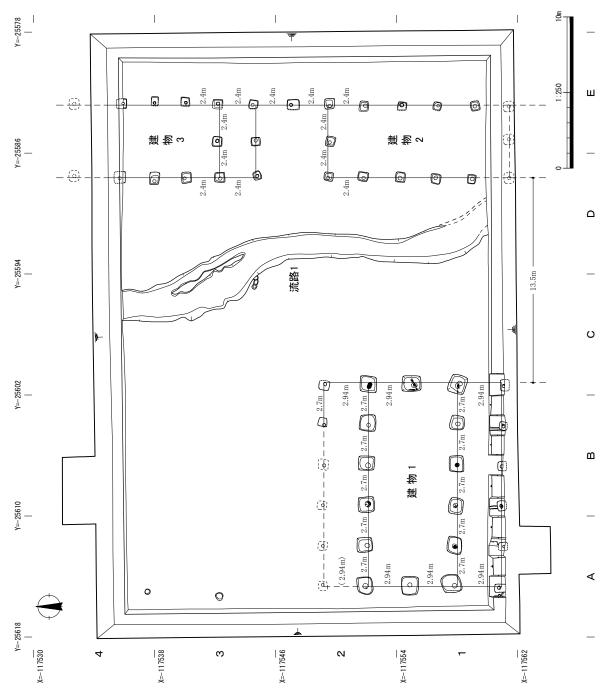
長岡京期の遺構は、正殿と見ている東西棟の建物 1、その東側の脇殿と見ている建物 2・建物 3 とした東辺が連続する 2 棟の南北棟、合わせて 3 棟の建物を検出し調査を行った。これらの建物群は、軸線の共有性や配置関係などから、一つの邸宅敷地内に計画的に設定された建物群の一

画を構成するものと理解される。ここでは、まず建物個々について記す。

なお、建物1と建物2・3の間で湿地西肩に沿うように南流する流路1が、長岡京期にまで用 水路機能を持って維持されていたと見ているので、流路1上層を中心にここでも記しておく。

## 建物について

建物  $1\cdot 2\cdot 3$  は 3 棟ともいわゆる掘立柱建物である。以下では建物個々について順次説明する。 建物 1 は、梁間 2 間、桁行 5 間の身舎に南北にそれぞれ庇が付く、合わせて 4 間× 5 間の東西棟である。身舎の梁間 2 間は、柱心々の 1 間が 2.94m で約 10 尺、同様に桁行は 1 間が 2.7m



第29図 長岡京期の遺構平面図



第30図 建物1 南から ※推定 正(前)殿

で約9尺である。庇の出は南北両庇とも柱心々で1間2.94mである。

建物 1 の身舎の柱穴掘方の規模は、京域内では極一般的とも言えるが、このクラスの建物としてはかなりの大きさである。身舎の柱穴  $1\sim 14$  は、一見すると辺が不揃いに見えるが、個々は 1 辺  $1.1\sim 1.2$ m 程の隅丸方形の平面形状を呈しており、側壁はほぼ垂直に掘られている。柱穴掘方の深さは検出面から  $60\sim 70$ cm程で、底面はほぼ平坦であった。掘方周囲の土は砂泥粘質土であり、柱を受けるにはやや脆弱な感はあるが、礎板などを設置した柱穴は一つも見られなかった。柱当たりには表皮とも見られるものを含めて、木質が残っているものが多く、柱穴に埋まっていたいわゆる柱根部で、直径 30cm前後を測るものが大半を占めていた。柱根の内部は、全ての柱穴で粘質土であった。

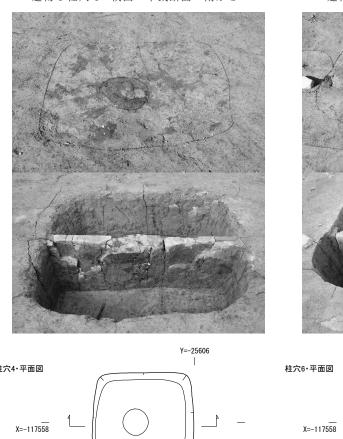
底の柱穴は、北庇では東端の2基の柱穴19と20しか残存していなかったが、南庇では追跡調査の結果6基全てを検出している。庇の柱穴規模は、身舎に比べると少し小振りで、1辺50~60cm程の隅丸方形であった。深さは40cm程で、側壁を含めた形状は立方体的であり、身舎柱穴に通じるものであった。柱当たりの径は30cm弱であり、庇の柱は身舎の柱よりは少し細いものが使用されていた。

建物1の柱穴からは、長岡京期の瓦を含む遺物が少量ながら出土している。身舎の柱穴6では、長岡京期の瓦片が出土しており、南庇の柱穴23でも掘方埋土から長岡京期の土器片と瓦片、同じ南庇の柱穴25柱当たり内から長岡京期の瓦片が出土している。柱当たりから出土した瓦片は、廃絶後に入り込んでいるので長岡京期の建物であったと理解出来るが、柱穴掘方から長岡京期の瓦片が出土することについては、踏み込んだ解釈が出来ると考えている。柱穴掘方からの瓦片の出土は、建物1の建立が建都初期ではなかったことを示していると理解される。建立が10年程と短い長岡京期の内の後半などと断定的に言える物証ではないが、この問題は当地域の土地利用のあり方を考える上で、かなり興味深い歴史の状況証拠ではある。

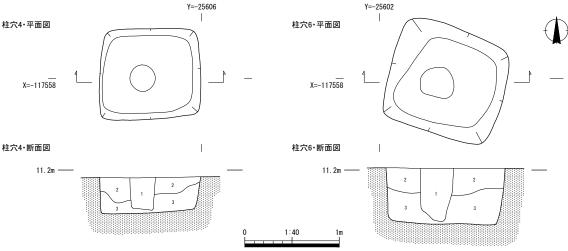
なお、建物1の柱穴に関しては代表例的提示ではあるが、検出発見から柱穴の掘り下げセクション断面を含めて、調査過程を知ってもらう意味で第31図に写真や実測図資料を掲載している。

建物 1 柱穴 4 検出・半裁断面 南から

建物 1 柱穴 6 検出・半裁断面 南から







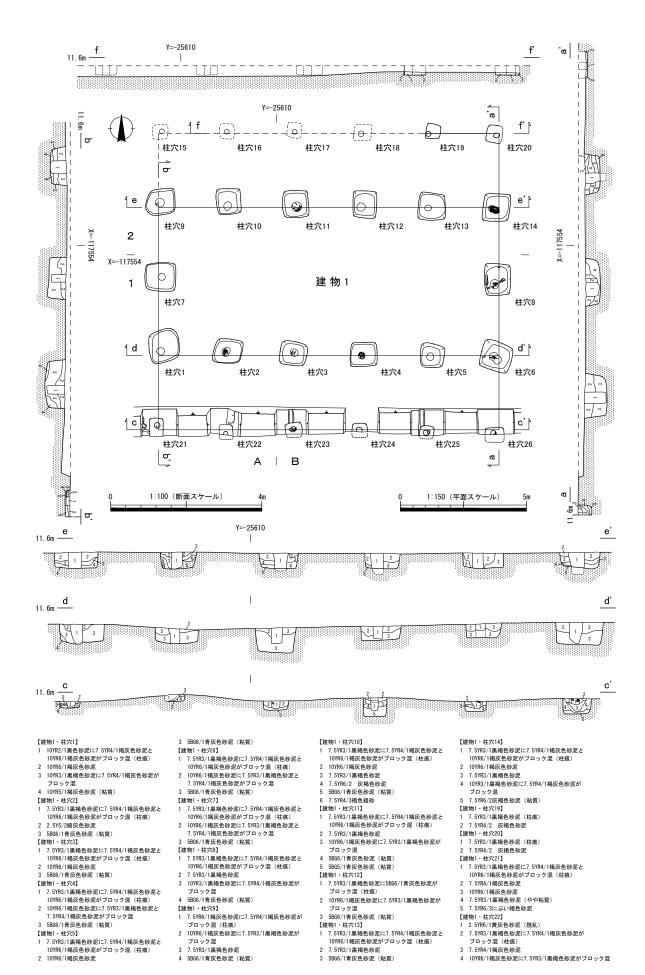
- 1 7.5YR3/1 黒褐色砂泥に7.5YR4/1褐灰色砂泥と 10YR6/1褐灰色砂泥がブロック混る(柱痕・木片含む)
- 2 10YR6/1 褐灰色砂泥に7.5YR3/1黒褐色砂泥と7.5YR4/1褐灰色砂泥がブロック混る
- 3 5BG6/1 青灰色砂泥 (粘質)

- 7.5YR3/1 黒褐色砂泥に7.5YR4/1褐灰色砂泥と 10YR6/1褐灰色砂泥がブロック混る(柱痕・木片含む)
- 2 10YR6/1 褐灰色砂泥に7.5YR3/1黒褐色砂泥と7.5YR4/1褐灰色砂泥がブロック混る
- 3 5BG6/1 青灰色砂泥(粘質)

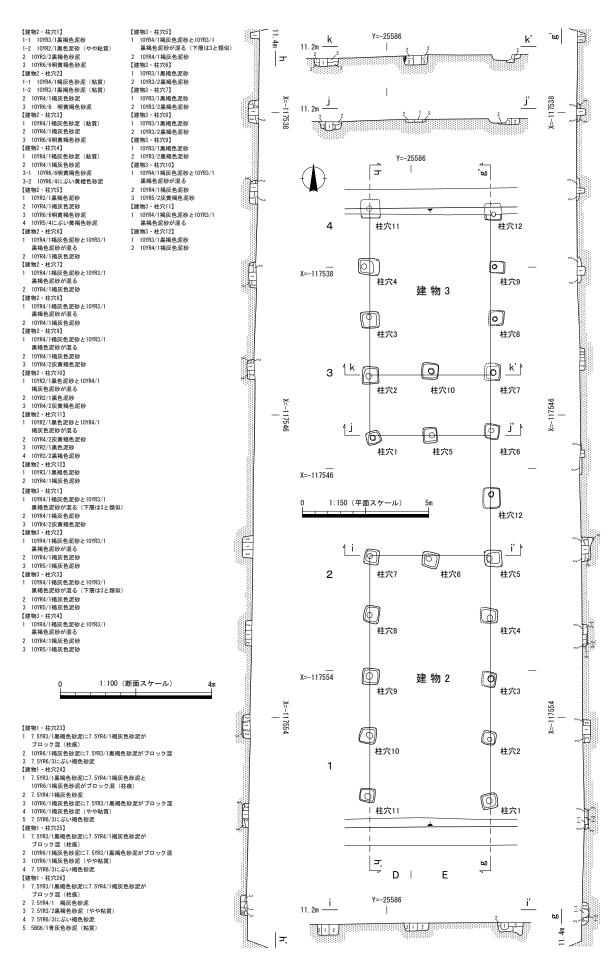
第31図 建物1柱穴4・6検出、半裁、平・断面図

建物 2 は、南北に併設された 2 棟の南北棟の内の南側に位置する建物であり、建物 3 はその 北側に位置する建物である。両者ともに掘立柱建物である。両建物は、後代に湿地を呈するよう になる弥生時代の旧流路が埋没している東側の低地に建てられている。両建物の検出出来た全て の柱穴では、底面がしっかりした粘土であったものが多いとは言え、礎板などがまったく使用さ れていなかった点については、建物の長期間の使用は想定されていなかったとの推測も可能と考 えている。

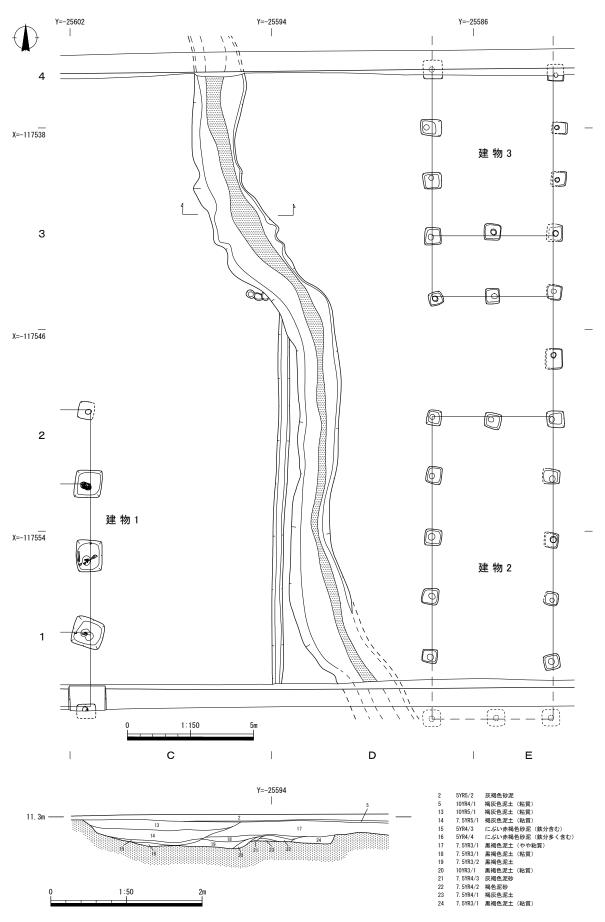
建物 2 は、東部の低地側で検出した南北棟であり、身舎部だけでの建物である。東西の梁間 2 間、南北の桁行は 4 間分を検出し調査出来た。桁行は、5 間目が半分程度で南壁へ延びているので、



第32図 建物1平·断面図



第33 図 建物2・3平・断面図



第34図 流路1平·断面図

少なくとも 1 間は南に延びるだろう。1 間だけ延びれば 2 間× 5 間の南北棟となるが、さらに延びる可能性もあるため断定的理解は置いておく。柱間は梁間、桁行ともに、柱心々で 2.4 m を測る約 8 尺の等間隔である。

建物 2 の柱穴の平面形状は、1 辺約  $50 \sim 60$ cmの隅丸方形を呈し、深さは  $20 \sim 40$ cm程と少しバラつきがある。柱当たりの径は、25cm弱程とあまり太くはない。柱穴 4 や 8 の柱穴掘方からは、長岡京期の土器片も出土している。

建物 3 は、建物 2 の北側の低地部で柱穴を検出した。柱穴や柱根部の柱サイズ、柱心々間が 2.4m で約 8 尺など、建物としての基礎要素は建物 2 とほぼ共通している。南北の柱軸も建物 2 と通っており、2 間分の空間を挟んで南北に並列して建てられた、2 間×4 間以上の庇を持たない身舎部だけの、共通的な規格性を有した南北棟と見られる。なお、建物間の空間となる 2 間の東辺には 1 基柱穴が設けられており、両建物の東辺のみは連結していることになる。建物 3 の柱穴は、西辺列と東辺列ともに 4 基、南部では両辺の間で 2 基検出しており、北辺部は調査区北壁外へと延び、5 間あるいはそれ以上の規模になるものと推測される。建物南部の南庇的柱構造には、ある種の違和感を持つが、建物 2 の南辺部が南壁外へ延びているため、その解釈と位置付けは置いておく。

建物 1~3の3棟の関係性に関しては、建物 1の南北中軸線は、西半の 1/2 町の内では 1/4 ラインを通る南北中軸線にかなり近い、あるいはほぼ重なるラインに位置していると見られる。建物規模は、南北庇が付しているとはいえ若干小振りだが、南面する正殿との解釈が出来るものと考えている。建物 2・3 は、建物 1 の東辺から 13.5m 距離を持って配置された、北で 2 度西へ振る軸線を共有した南北棟の 2 軒の東脇殿と見ている。

邸宅敷地の問題や、正殿と脇殿の配置問題などは第5章の考察とまとめで記す。

流路1は建物1と2・3の間の微高地と低地の肩沿いを、北北西から南南東方向へ流水していたと見られる遺構である。長岡京期の段階では、幅は2~3m程で、調査区南壁外へと延びているようである。上層部と中層上面では砂層も見られたので、流水も一定レベルであったようである。弥生時代に用水路の一部として整備されたようだが、厚めの中層を挟み、上層以上が再整備されて、長岡京期に邸宅内で機能していたものと考えている。性格は、南庭が途切れない空間使いとも見られるので、遣水と見るよりは邸宅内の用排水路であった可能性を考えている。上層からの出土遺物は、長岡京期の土師器、須恵器の土器片が主体であり、北西からの生活用具の廃棄もあったものと見られ、長岡京期には開口して機能していたものと見ている。上層の上部~最上層からは、中世の土器片も少量ながら出土している。長岡京廃絶以降に埋没は進んだのだろうが、中世頃までは浅い凹みとなった流路が残っていたようである。

#### (4) 奈良時代以前の遺構(第35図~第40図)

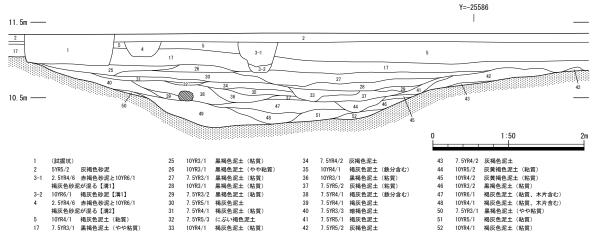
奈良時代以前の遺構は、調査区の 1/3 程を占める調査区東部の低地側で検出調査した流路 1・2 である。東部の低地は、平安時代から中辺にかけて湿地化しており、中世には堆積土の上面が

水田として利用されていたと見られる。流路 1・2 は、やや粘質の黒褐色砂泥を主体とした湿地内堆積土を掘り下げて検出している。そこでは流路 1 の上層部、及び流路 2 と重なり、流路 2 に切り込んで成立していた建物 2・3 を検出し調査を進めた。その後に、長岡京期の建物のベースとなっていた暗褐色粘質土泥砂層など、流路 2 に被った古墳時代以降と見られる薄い堆積層を掘り下げた後に、流路 2 の輪郭を検出している。弥生時代の流路 1 は、同遺構の中層を掘り下げた後に、弥生時代の遺物を主体とする褐色系の色調を呈した粘質砂泥土などの、構内堆積土の掘り下げ調査によって確認している。小規模の西側の流路 1 と大規模な東側の流路 2 は、調査区内ではほぼ並走するように南流しており、流路 1 は調査区南壁近くで東を向いて、柵(しがらみ)の西側で流路 2 に合流している。

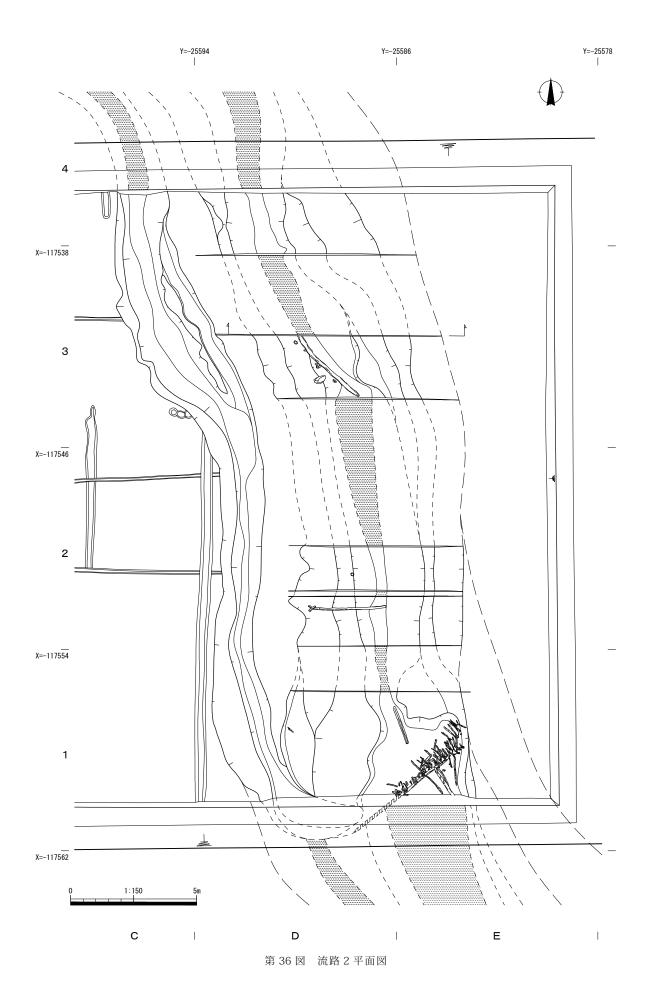
流路 1 は、幅 2 ~ 3m 前後の幅で、東部低地の西肩である西半部の微高地の東辺沿いを、北北西から南南東へ南流している。深さは 50 ~ 80cm程で一定ではないが、全体的には底部は南へと下っている。長岡京期に機能していた中層上面や最下層の一部では、砂層なども確認出来ることなどから、弥生時代にも長岡京期同様に、砂を運ぶほどの流量と流水があったものと考えられる。長岡京期に再整備された流路 1 の上層以上は、宅地内の用水の確保を目的として流路とされていたようだが、弥生時代の流路 1 下層以下は、流路 1 の支線的な農業用の排水路であったと考えている。

流路1の下層~最下層からは、少量の木質資料を伴って、弥生土器片がかなりの量まとまって出土している。弥生土器片は壺、甕を中心として、水注や高坏片なども含まれている。甕の体部外面には、使用痕的な煤が付着するものもあり、これらの遺物はすぐ西側よりは少し北西に推定される集落跡から廃棄され、流水により流されてきた生活用具の破片と見ている。弥生土器類の型式特徴からは、山城それも乙訓地域の地域色が認められる第IV様式に属するものが主体を成しており、時代的には弥生時代中期後葉頃に位置付けられる。

流路 2 は、幅約 8m 前後で深さ  $0.8 \sim 1.2$ m 程であり、断面形状は両側面が緩やかに下り、底部付近が深くなる鉢状を呈している。流れ的には流路 1 の東側を、北北西から南南東へ緩やかに蛇行しながら南流する。周辺の既往調査成果から調査区外では、少し東へ振れて東南流しなが



第35図 流路2セクション土層断面図



ら桂川の合流部へと向かうようである。調査区内の南壁際で柵を検出しており、流路の側壁や底部などにも人の手が入っていることが理解出来るので、人工的に整備が加わった用水路である点は明らかである。しかし、全面掘削して設定されたものであるのかに関しては、調査地の西側を南東流している現存の西羽東師川との関連性から考えると、同河川の旧流路の一つとの見方が妥当と考えている。調査区西半の高みは、自然堤防上の微高地に人工の整地が加わったものと推測しているが、旧流路はその高みの東側に取り残されたものであり、所々で後背湿地化していたものの一部と見ている。弥生時代中期に流路1の設定と、流路2に柵を含めた整備が加えられて、一本の用水路となったものと考えられる。

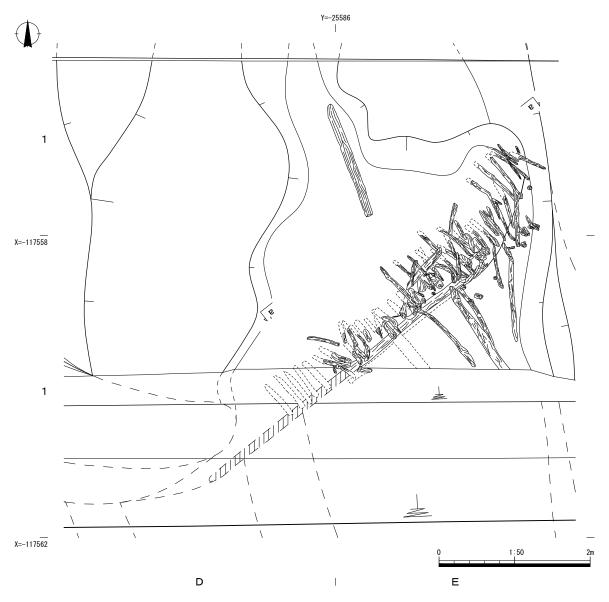
流路2の構内堆積土は、黒褐色系の粘質の泥砂土系が主体を成しており、埋没後も地下水が集まる地下流路となっていたと見られ、水分の保持が続いていたようである。このため流路内からは、加工木を含む流木類がかなりの量出土しており、流路南部の西斜面や柵付近では、木製の道具片や板材なども少量ながら出土している。この他に構内堆積土からは、弥生土器片も一定量出土している。これらの弥生土器片の様相は、流路1の下層~最下層から出土しているものに通じており、山城の第Ⅳ様式に属すると見られるものが中心である。このような土器様相の共通性からも、流路2は流路1と同時代の弥生時代中期の後葉頃には、共通する目的である農業用水路として、流路1と同時に整備されたものと考えられる。

#### 柵(しがらみ)遺構

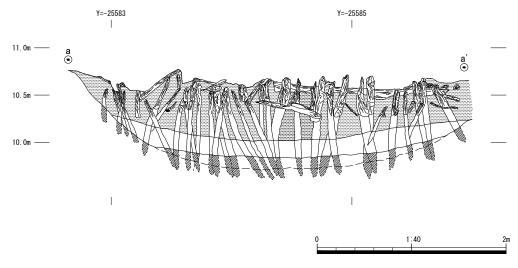
柵は、流路を塞き止めるため杭を打ち並べて、これに竹や木を渡したものと広辞苑などには記されている。京都や大阪の沖積低地の調査などでは、柵の既往調査例がいくつも知られている。今回の調査において流路2で検出した横木や斜めの杭列は、まさにその柵と理解される遺構と見て良いだろう。今回の検出分は、流路2の東肩から少し下った位置で、流れに対してはほぼ直交するように設置されていた。このため流路が南東へ振る位置での検出となり、東半分しか検出することが出来なかった。西半部は南壁へ延びており、安全確保の観点からも追跡調査を断念した。検出出来た東半部から柵の様相や推測を含む形になるが、構造などに対する認識を記しておく。

柵は東半の 7.5m 程を検出し調査している。検出部分では流れに直交する形で、20cm弱の太めの横木が設置され、その北側(上流側)に横木に対して直交させ、上部を横木にかけて根を北側に広くとる斜木とした径 10cm弱の杭を並べて設置している。斜杭は隙のない櫛歯状、あるいはあじろ状を呈しており、上流からの流れ物を全て受け止めてしまうようである。そのため流木がたくさん絡んでいた。横木は 2 段分確認しており、下流側に斜木に直交する形で横木を止めている。全部を確認出来なかったが、さらに下に一本以上の横木が設置されていたようである。間隔は少し空くが、横木の北辺には縦杭も設置され横木を止めている。

柵は、本来的に流れを塞き止めると言われている施設だが、塞き止めることに本義があるのではなく、塞き止めて水面をダムアップすることで水量を確保し、高くした水面から用水路を引き出し、田畑を灌漑することに本義がある施設である。今回検出した柵に関連するような水路は検



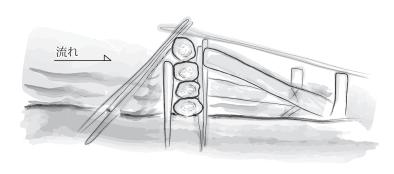
第37図 流路2・柵(しがらみ)平面図 (1:50)



第38図 柵(しがらみ)立面図 (1:40)

出出来なかったが、今後の近辺調 査の成果に期待したい。

設置年代に関しては、柵の杭の 根付近から山城第Ⅳ様式に属する 土器が出土しており、流路 1・2 の整備と同時期に形成された施設 であったと見て良いだろう。



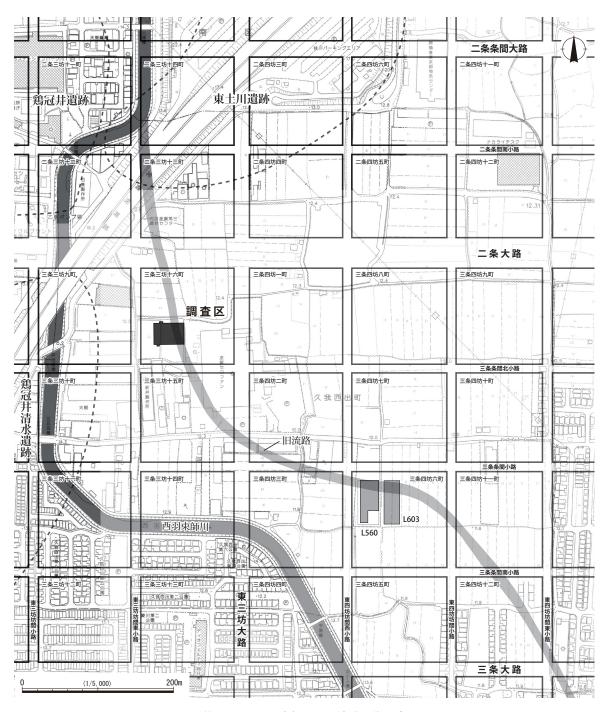
第39図 流路2・柵(しがらみ)断面概念図

#### 西羽束師川の旧流路の復元案

現在の西羽束師川は、向日丘陵の東裾からさらに緩くなった傾斜面から低地の変換ラインにほぼ沿うように南流して、淀で桂川に流入している。上流は向日市北半では西北へ振り、向日寺戸あたりでは人工的に北方へ延びている。上流への追跡はここでの課題ではないが、秦氏が開発したとされている桂川の西側に設けられた、一の井から分流された用水路へとつながっているようだ。元来、秦氏の用水路も完全な人口部と自然流路に手を加えて、それらをつなぎ合わせ、長い用水体系を完成させていたのだろう。古墳時代の内に全てつながったかの問題があるが、ここで主題となる流路は弥生時代のものであるため、この点はここでは置いておく。

今回の調査で検出し、調査した流路2とした遺構は、調査区南部で柵(しがらみ)遺構の一部を検出しており、共伴していた土器から弥生時代中期後葉頃には用水路として整備され機能していたものと見られる。この用水路の検出プロセスは、上層部の流路範囲を大きく越えて、東へ大きく広がる湿地の掘り下げ調査後の湿地の底部であった。流れは北北西から南南東へと推定される。

ここで周辺の既往調査成果に着目すると、当調査地から東へ二町行って、南へ二町下った左京 三条四坊六町における調査区の北部で、北西から南東へ流れていたと見られる弥生時代の流路が 報告されている。ここでの流路も、中世まで生き残っていたと見られている湿地の底部で検出されている。湿地を含めて堆積土や出土遺物などの諸要素の共通性はかなり高く、当調査地の流路 と連続させて見るべきと考えて第 40 図を作成した。情報は限定的だが、当調査地点では西側、そして三条四坊六町の調査地点では南西側が淡黄褐色系の泥砂土で形成された、上面が長岡京期 に平坦に削平されているようで分かり難いが、未発達的な自然堤防的微高地と見て良いだろう。このように見ると本来的にはこの水路は、自然河川として流れていたものが、自然堤防的高みの東側に後背湿地状態で残っていた旧河川跡に、人工的な改作を加えて、流路化して耕作地へ生かしたものではないかと推測している。流れの方向復元は、現在の西羽東師川の蛇行した流路も参考にしている。現在の西羽東師川は、この旧流路の流れの有様や、機能目的を受け継ぐ形で後代に整備されたものと考えている。調査地から南東へと広がる低地水田への用水を確保し、低地水田に水を供給する当地域の水田耕作にとって、非常に重要な用水路であったと見られる。今は洛西の幹線排水路とされているが、本来の用水路としての歴史は、この地域では古墳時代を越えて弥生時代にまで遡る可能性の一端を知見出来たことは、大きな調査成果の一つである。



第40図 西羽束師川の旧流路の復元案

# 第4章 遺物

## はじめに

今回の発掘調査から出土した遺物は、コンテナバットにして10箱である。その内4箱が土器類、6箱が木製品であり、これらの遺物は縄文時代から近代にまで及ぶ。出土遺物の量的推移の大様を示す意味で、時代別に位置付けた土器・陶磁器を主とした遺物の破片点数を掲載している。

遺物が多数出土している時代は、山城第IV様式と見られる土器を中心としている弥生時代中期後葉頃と、土器類を中心とした長岡京期にほぼ限定出来る。弥生時代中期以前の遺物は、断定的理解は難しいが、極小片に砂粒を含む黒灰色の胎土の様子から、縄文時代晩期頃の土器片の可能性のあるものが少数見られる以外はほぼ皆無である。しかし、弥生時代中期後葉頃とされる山城第IV様式に属であろう弥生土器の壺・甕を中心とする土器類は、かなりの量が出土している。これらは主に、調査地東半部の低地側に位置する流路1の下層から最下層、及び流路2の中層から下層で出土している。流路1では少数だが、流路2では柵(しがらみ)も含めて、道具類を少し含む自然木を主とした木質遺物も多く伴っている。土器類は、高坏や水注などもみられるが壺・甕が主体であり、甕には使用痕の煤が付着するものも少なくなく、近接地からの生活用具が主体である。しかし、現時点では、なぜその変化が当地近辺に定着的に展開しなかったのかを理解することは難しい。弥生時代中期末から後期の大きな気候変動期の影響の可能性は考えられるが、今後の課題である。

弥生時代後期以降から古墳時代全般、及び飛鳥・奈良時代のかなり長期に渡り、極少数の土器を除くと出土遺物は皆無に近い。集落と近くない耕作地、あるいは低湿地へ戻るのだろうか。弥 生時代中期後葉頃を大きく凌駕する形で遺物の出土量が増加するのは、当地が都城へ組み込まれた長岡京期である。都が平安京へ遷都される平安時代前期には、遺物出土量が激減するので、遺物出土量が多い時期は長岡京期に限定される。

長岡京期の遺物は、土器・陶器、及び一定量の瓦が主体を成す。土器・陶器は、土師器の坏・塊・皿・高坏などの食器類、同甕などの煮炊き具、及び須恵器の坏・皿などの食器類と壺・甕などの貯蔵具が主体である。これら以外に土師器では、多くはないが製塩土器鉢片や、須恵器では調理具とされる鉢なども見られる。長岡京期の遺物の主体を成す土師器、須恵器は、長岡京期では都であっても、上下の階層差なく、焼き物の生活用具で主体を成している生活用具類に共通するものであり、土器ではあっても都城形と総括し得るものが中心である。

これら京域内では一般的な土器用具類の他に、須恵器では少数だが硯片も見られる。さらに土器以外に、三彩の範疇に位置付けられる緑釉単彩陶器の火舎などの破片が共伴出土している。この火舎は、同じ陶器の甑・羽釜・塊などとセットで使用される喫茶との関係を示す高級用具類である。文房四宝の一端を成す須恵器硯や緑釉単彩陶器は、上層貴族に属する人物が所有したであろう当邸宅の格の高さを示す遺物である。

これらの土器・陶器の出土総量に比すると、少し多く感じる長岡京期の瓦類も出土している。 軒瓦は少なく小片であり、平瓦、丸瓦が多い。築地塀や中心的な建物の棟瓦として使用されたも のが中心のようだ。ただ、正殿と見ている建物 1 などの柱穴掘方からの一定量の出土が見られ る点は注意がいる。これらの建物が、短い長岡京期の後半側で建てられたことを示す状況証拠か もしれない。

長岡京期が過ぎ、平安時代に入ると出土遺物は激減する。平安時代前期から中期は極少数にとどまり、若干なりとも増加が見られるのは、平安時代後期から中世前半(11世紀末~14世紀頃)になってからである。量は少ないがこの頃の遺物は、極少数の白磁・青磁を含むが、枚方の楠葉産の土師器皿と瓦器境、同鍋釜が主体であり、ベースは乙訓を含む畿内の中世農村に通じるものである。近接地に久我などの現代にまで連続する中世村落などが整備、成立した影響の表れであろうか。しかし、中世後半以降の出土遺物は、再びより少数化する印象である。近代以降にならなければ物質資料の増加は見られない。中世後半から近世、また近代の早い時期までは、管理された安定的な水田を中心とした耕作地帯であり続けたものと見られる。当地を含むこの久我の地域の再開発は戦後になってからであろう。

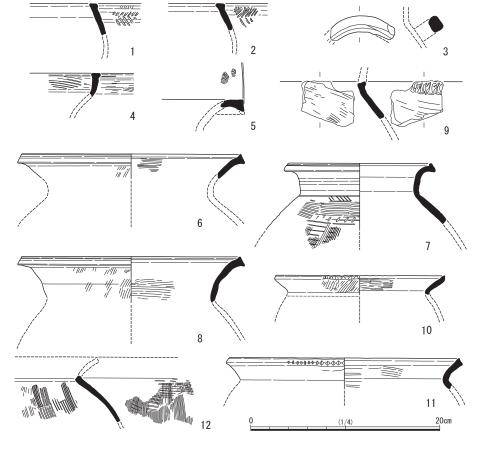
## 1. 出土遺物 (第41図~第50図、第1表・第2表、図版13~図版16)

奈良時代以前の土器では、新しい時代の層・遺構からも混入品が一定量出土するが、主には流路1の下層~最下層及び流路2の中・下層から出土している弥生時代の土器類・木製品類、石製品などが量的主体を占めている。古墳時代から飛鳥・奈良時代の遺物は、ほとんど見られず、流路1・2の上に残った湿地内堆積土から出土している須恵器高坏片が、断定的な理解が出来る唯一の遺物である。

第41図は流路1下層・最下層から出土した弥生土器である。1・2は鉢、あるいは台付鉢の口 縁部である。両者ともに口縁部外面に櫛描きの列点文が見られる。3は水差しの把手である。

4~9は壺類である。4は受口の広口壺であり、口縁部内外面はハケ目調整である。5~8は 広口壺で、この内7は頸部が短めで広口短頸壺としても良いだろう。6と8は口縁部内外面にハ ケ目痕が残る。7の口縁部内外はナデで仕上げ、体部外面はタタキ痕の上をハケ目調整している。 9は受口の広口壺の頸部下端から体部上端部付近の破片である。頸部下端付近に、指頭圧痕突帯 が付加されている。これら広口壺の区縁端部は、ナデにより器厚よりも上下に少し肥厚し、幅が 広い端面を呈する。口縁端部の断面形態は、角に丸味を持つ小三角形状を呈する。桂川西岸の乙 訓地域では、レギュラーな口縁形態であり、在地産を主体とするものと見ている。

10~12 は、煮炊き具の主力である甕である。10・11 の口縁端部の下端角には、刻目文を施している。乙訓地域でも第 VI 様式頃まではよく見られるものである。口縁端部の断面形態は、10 は下端角があまり肥厚せず、上端だけが少し突起する極小さな三角形態にとどまっているが、11 は先に記した広口壺の小三角形状を呈する形態によく似ている。この甕も広口壺で主体を成



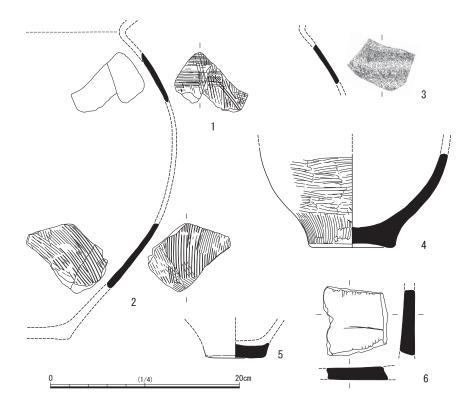
第41図 流路1下層・最下層出土弥生土器

すものと同様に、在地産と見て良いだろう。12 は口縁を欠くが、外面に煤が付着しており、胎土も11 とよく類似しているので在地系の甕と見られる。体部内外面は、ハケ目調整で仕上げているが、外面のハケ目下には、タタキ痕跡と見て良い数条の凹状の圧痕が認められる。12 を始めとして、共伴出土している甕の体部片と見られる多くの破片の外面に、使用痕跡と言える煤が付着するものが少なくない。集落遺跡などで使用されていた生活用具類が、流路に廃棄されたものと見られる。流路1の西側から北へ広がる元々の自然堤防状の微高地上面の近接地に、集落遺跡などが進出していたことを示し、またその時期に流路1が整備され機能していたことを示す遺物と見ている。

これら流路 1 の下層・最下層から出土した弥生土器には、壺や甕の在地産的な型式特徴や、ハケ目下のタタキ痕跡の露呈が進み始めている様相など、今回図示出来なかった破片の中にもいわゆる多条の凹線文を持ったものが含まれている。これらの点などからは、山城それも桂川西岸の乙訓地域の、第Ⅳ様式に属するものを中心とした土器群と見ておきたい。時代的には、弥生時代中期後葉頃に比定される。

第42図に掲載した土器や石製品は、流路1のすぐ東側を南東流する規模の大きな流路2の中・ 下層から主に出土した遺物である。

1・2 は弥生土器の甕の体部片である。1・2 は外面をハケ目調整で仕上げているが、1 の外面には煤が付着しており、ハケ目下に薄く残るタタキ痕が確認出来る。1・2 は接合してはいないが、



第42図 流路2出土弥生土器・石製品

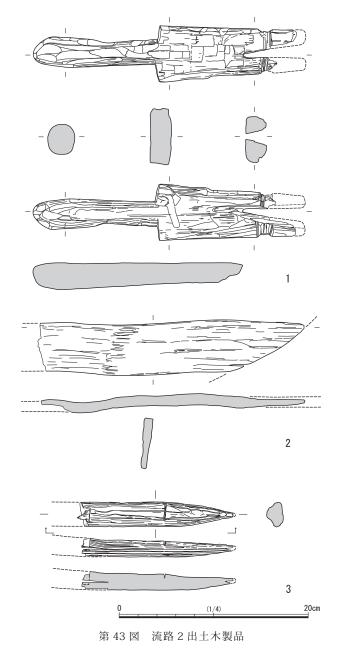
胎土はよく類似しており出土地点も近いため、同一個体片と見ている。

 $3\sim 5$  は壺の体・底部片である。3 は形状から広口壺の体部片と見ている。内外面ともにハケ目調整で仕上げている。4 は長頸壺の底部と見ている。外面は裾を縦方向にヘラ磨きし、体下部から上位はほぼ平行状にヘラ磨きしており、やや古相を持つようにも見える。5 は底部の一部しか残っていなかったので、推測を広げない方が良いが、広口壺の底部の可能性があると見ている。

6 は薄い板状を呈する砂岩の石製品である。狭い 4 面はともに割れ面であるが、広い 2 面は一部擦痕が入るが、非常に平滑で使用痕と判る。両面ともに金属器を研磨していたものと見られる。砂岩はいわゆる堆積岩の一種であり、西山から北山へ連なる堆積岩を母岩とする丹波山系、あるいはそこから流出した河川の川原石を加工したものであろうが、いずれにしろ、この地域でも入手可能な石材(砂岩)で作られて、当地域で使用されていた研石である。

流路2の中・下層から出土した弥生土器類も、流路1下層・最下層から出土しているものと 同様に、畿内第Ⅳ様式の幅に収まるものが主体のようである。なお、流路1・2から出土する土 器群に関して別の面での注意が必要と考えている。それは、第Ⅲ様式以前のものや第Ⅴ様式以降 と見られるものが、ほとんど含まれていない点である。このような出土状況は、当地の進出した 弥生の集落の土地利用の短期性を示すものであり、様々な視点から理解を深める必要がある問題 を内包していると考えている。

第43 図に掲載した木製品は、流路 2 から出土したものである。木質遺物は、長岡京期の建物 柱穴や流路 1 などからも出土しているが、流路 2 からは、弥生時代中期後葉(第Ⅳ様式)頃に 位置付けられる木製品が最も多く出土している。流路 2 からは、柵(しがらみ)の用材の他、た



くさんの流木的な自然木や加工が加えられた道具、あるいは道具の一部を構成する木製品などが一定量含まれている。1は流路2の調査区南部西斜面の中程に沈殿したような状態で出土している。図示した3点の他の小片の木製品類は、共伴している土器類とともに、北西の近接地の微高地上に弥生時代の集落が存在していたことを示す物証と見ている。

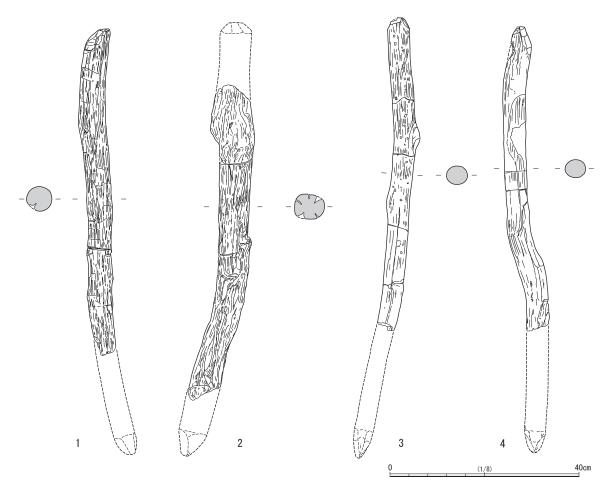
1 は握りの長さが 13cm程の片手で握る タイプの木製の把手である。握り部はノミ で切り込みを入れた後に削り出して成形し ている。握りの先に厚さ 2cm程の偏平な方 形部が削り作られ、その先が二又に加工さ れている。二又の加工は、何かの道具を挟 み込んで取り付けるための加工と見られ、 二又の基部の溝状の握り込み加工は、取り 付け物を括り付ける紐などの掛かりが目的 であろう。ただ取り付けられる道具がどの ようなものであるのかは、推測の域を出 ず、理解は今後の課題である。

2 は割り裂いて狭面に、若干曲線的に削り加工を加えたとも見られる板状の木製品である。天井板か底板かの判断は難しい

が、容器などのパーツの一部が割れたものであろうと考えている。

3は一方が割れて欠失しているが、片方は削って尖らせている。本体部の断面は、上部が狭く底部が広い山型状を呈する。上面、側面、底面ともに削り加工しており、一方は削り加工して、尖り状に仕上げている。本体側がどれほど延びるのかは全く不明であるが、人体に近い程の長さがあるものであれば、長弓の片側端部のパーツと見ることも出来ると見ている。樹種が判明してから再検討が必要だろう。

第44図の1~4として掲載した木製品は、全て柵(しがらみ)の横木の北側に、北からの流れを受けるように、斜に並べて設置された柵の構成材である。調査した部分だけでも柵の斜木は、20本を超える数が確認出来る。斜材の大半は、自然木の枝材を0.9m~1m程の長さで切り出し、両端に若干削り加工を加えたものが主体であった。斜材は遺構の柵の構造概念図(第39図)でも示したように、柵の北側に斜めに打ち込み、南上端は柵の本体横木にもたれかけた状態で設置



第44図 流路2出土柵(しがらみ)関連材

## していたようだ。

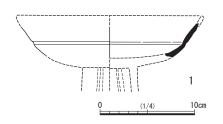
残存状態がまだ良いと見たものを6本程サンプル採取して資料とした。しかし、斜材が脆く、取り上げ時に原形を保持出来なかったものが大半であった。採取したものは図に提示したものを含め、一方の削り加工は確認出来たが、もう一方の削り加工が確認出来なかったものばかりであった。他の類材などからは、もう一方はもう少し尖り気味に削り加工していると推測出来るので、図ではそのように破線復元している。サンプル採取したもの以外の柵構成材は、整地土下に残る可能性が高いため現場保存の形で残っている。

なお、木製の道具類の一部、柵の用材の一部及び流木の一部の計 13 点については、樹種の鑑定を依頼した。個々の資料の樹種については、遺物の最後に付した鑑定報告を参照されたい。

鑑定数が少数につき、断定的理解は難しいが、西山から向日町丘陵上のこの地域の常緑広葉樹林を主体とした、自然森林を構成している樫類などが多いと見て良いようだ。加工木もこの地域から西羽束師川の上流部地域の自然森林から採取したものを用いており、流木類も同様の自然森林から流路に流入したものと見ている。流入の原因は、災害とも見られるが、それを知るためには木質資料全体の樹種鑑定や、太い流木資料には年輪年代測定が容易に可能と見られるものも含まれているので、年代測定を加えて木質資料の実年代を把握し、理解を深める必要があるだろう。しかし、現状の整理費用枠での実施は困難であるため、京都市へ問題意識を持ったフォローをお

願いしておきたい。乙訓の弥生時代中期後葉(第Ⅳ様式) の実年代の一端と、災害などの一端が明らかとなる可能性 が十分あるだろう。

第45図の1は、流路2上層が湿地状を呈したものとなっていた段階の堆積土である、暗茶褐色泥砂層から出土している須恵器高坏片である。この須恵器片は口縁端部や脚部



第 45 図 湿地出土須恵器高坏

を欠失しているが、体部外面中位に括れ的とも言える凹線が施されるという特徴を持っている。 この型式特徴から、古墳時代後半期の須恵器高坏の坏部片と見て良いと考えている。6世紀後半 を中心に、前後に若干の幅を持たせて位置付けておく。

古墳時代から奈良時代にかけては、出土した少数の土師質の土器小片が、この時代のものかと 見られるものがあるが、断定的理解は避けておく。いずれにしても、弥生時代中期中葉以前と同 程度に遺構も見られず、出土遺物が極少数であることは、歴史実態を反映したものであり、当調 査地を含むかなり広範囲が、水田中心の耕作地帯であったものと理解しておく。

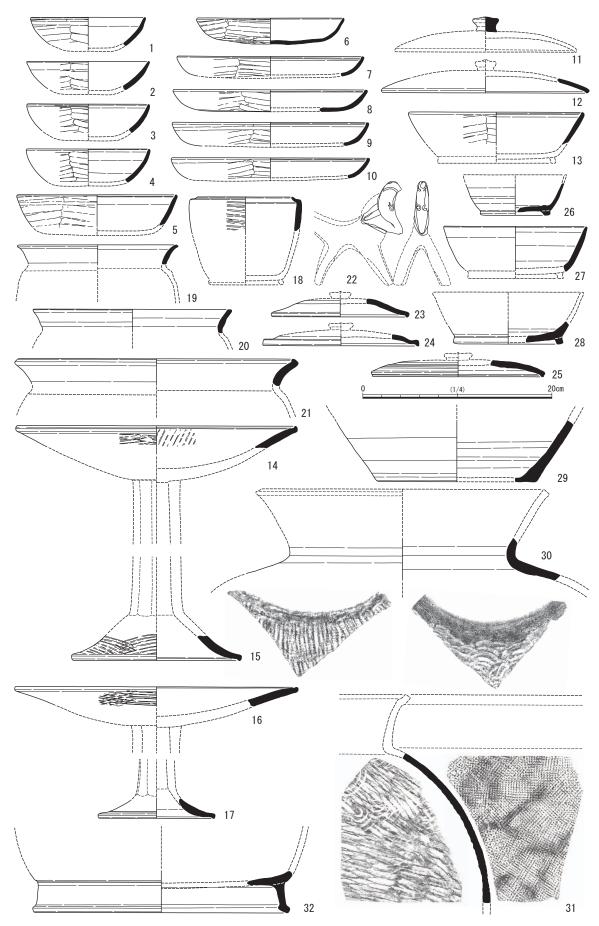
第 46・47 図に掲載した遺物は、長岡京期の建物柱穴や流路 1 の中・上層部などからの出土遺物、 及び平安時代から中世の遺構や包含層への古手混入品として出土していて、同期に比定出来る遺物も加えて提示している。出土層遺構の詳細は観察表を参照されたい。

第 46 図の 1  $\sim$  21 は土師器で、22 は土師質の土馬である。23  $\sim$  31 は須恵器で、32 は緑釉単彩陶器である。

 $1 \sim 4$  は土師器城 A、5 は坏 A、6 は皿 A II、7  $\sim 10$  は土師器皿 A I である。これらは編年の便宜上、土師器の小型食器とまとめている。

図示した土師器の小型食器類は、全て京域主流派の製品と見ている。 境・坏・皿ともに口縁部から体部・底部の外面全体をへう削り技法で仕上げた、いわゆる c 手法の土師器食器である。口縁外面下端付近にナデの狭い凹み痕跡を残すものは、e-c 手法と表現している。これらの土師器の小型食器類は、法量、かなり均質感のある c 手法仕上げ、体部から口縁部の開き度合いなどの主要な型式要素の共通性からは、京都 I 期中に収まる資料と言える。 さらに細部特徴を見ると、1~4の境 A は法量と深さ感などから、平安京最古型式より少し古い京都 I 期中の古と見え、皿 AI の 9・10 は、体部の開きなどから同様に京都 I 期中の古と見える。しかし、同じ皿 AI の 7・8 は、法量が少し小振り化している他に、体部の開きが若干大きくなっている点からも、京都 I 期中の古~中と若干新相の幅を持っていると見ることが出来る。5の坏 A は古相側の京都 I 期中 古的に見えるが、6の皿 AII は、法量・形態薄手化の各要素ともに、京都 I 期中の古の最新~京都 I 期中の中の幅で見ることが出来ると考えている。私見総括的には、京都 I 期中の古にウェートがあるが、京都 I 期中の中方向が具体化しつつあるように見える。いずれにしろ、京都 I 期中の古段階 = 長岡京期(784~794年)に収まるものと見ている

11・12 は土師器坏 B の蓋である。11 はつまみ部だけが残っており、12 の天井外面にはヘラ磨きと見られる痕跡があるが、不明瞭であったため図化はしていない。台付の付坏 B の身に被



第46図 長岡京期の土器・陶磁器

る蓋である。13 は坏 B の身である。体部から口縁部外面に c 手法的ヘラ削り痕跡があるが、ヘラ磨き痕跡は不明瞭な状態であった。本来的にはヘラ磨きが加えられていて良いと見ている。

 $14 \sim 17$  は土師器高坏の坏部と脚部である。14 と 15 は同一個体と見られるが、接合出来る脚筒部が確認出来なかった。16 と 17 は別個体である。 $14 \cdot 16$  の坏部片は、両者ともに外面のへラ磨き痕は確認出来るが、内面は一部に暗文が残るものの図化出来る程には確認出来なかった。ヘラ磨きや形状からは、京都 I 期中を中心に見て良い資料である。

18 は、奈良文化財研究所の言ういわゆる土師器壺 E (身) である。口縁部は内傾する受け部を持ち、本来は蓋が被る小壺である。体部外面には、ヘラ磨き痕が若干確認出来る。薬壺の可能性もあるが、理解は今後の課題である。

 $19 \sim 21$  は煮炊き具の土師器甕である。 $19 \cdot 20$  は長岡京や平安京で量的主体を占めることは無い少数派だが、類例は少なくはなく、口縁形態などから南河内産の甕である。21 はここに 1 点しか提示出来ていないが、本来京域主流派に属する甕である。出土遺物の中には同タイプの体部片などがいくつか見られ、タタキの上をハケ目調整したものも見られる。それらには煤の付着した使用痕跡が残るものも見られる。当邸宅内で使用された生活用具であろう。

22 は淡橙色に焼き上がった土師質の土馬の頭部である。都城使用の水際の祭祀用具の一種であり、平城京末期頃から平安時代前期前半頃まで量産的に定型化したものが、少しずつ小型化が進みながら、都内から同周辺地域で継続して出土するものである。

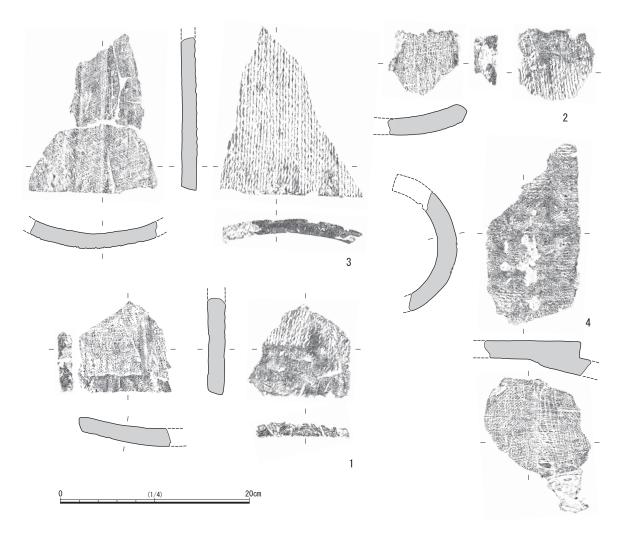
23~25 は須恵器坏Bの蓋である。24 は天井周縁が括れており、形態的には新相を呈するものであり、逆に25 などは笠形のままで古相との見方も可能だが、23 を含めて三者とも長岡京の既往調査資料に類品はいくつも確認出来る。

26~28 は須恵器坏Bの身であり、小や中小サイズのものである。高台と体部の立ち上がり、 角との距離の無さから、長岡京期に収まって良い資料である。

29~31 は須恵器甕の破片である。貯蔵具的使用が主体の甕にあっては、三者ともに中~小型に位置する日常生活用具的なレベルの須恵器甕である。

ここで図示した須恵器食器類や甕は、全てが大阪の陶邑産でも良いと見ているが、他の出土遺物の一部に、口丹波の篠窯産や播磨産の可能性のあるものが含まれている。産地同定には注意が必要であり、今後の課題の一つとしておく。須恵器の年代観については、土師器と同様に長岡京期(784~794年)に収まる資料が主体を成していると見て良いだろう。

32 は破片に釉は残存していなかったが、底部周縁に付けられた高い貼り付け高台や残存部から推測出来る上部形態、及び白味を持った軟質の胎土などから緑釉単彩陶器の火舎の底部と断定的に理解出来る。和太鼓の胴部状の体部形態を持ち、中位上に猪目状の焚口とその奥に長方形の透かしが数条付く。上部は少しすぼまる円形の口縁を持っているものである。後代の器形名称では、風炉と称されている茶関係の器物に類例が認められる。ただこの器物が単独で炉として使用された訳ではないようであり、長岡京や平安時代初頭の既往出土例からは、同じ緑釉単彩の羽釜、同甑、同埦などとセットを成して使用された器物と見られている。今回の調査でも器形までは不



第47図 長岡京期の瓦

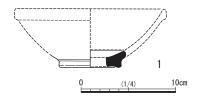
明のものを含むが、緑釉が残ったものを含む小片が数点出土している。都の生活文化の高さを示す希少遺物である。

第47図では長岡京期の建物1の柱穴掘方から出土した瓦類を図示した。1・2はともに平瓦片であり、建物1の柱穴6の掘方から出土している。3も平瓦、4は丸瓦であり、この両者は建物1の柱穴23の掘方から出土している。軒瓦でもなく瓦単独からの年代特定は難しいが、タタキなどの技法痕跡や焼成結果から見ると、他からの搬入品を含めて長岡京で使用された瓦類の一部と見て大過はない瓦片である。

これらの瓦類は、別の一面から注目される資料である。長岡京の存在期間は、延暦三年(784年)から延暦十三年(794年)の11年弱の短命の都である。しかし、この建物1の柱穴掘方から出土した瓦資料は、建物1が長岡京の最初期に建てられた建物ではなく、少なくとも初期建物などが一度壊れた後に、使用されていた瓦が瓦礫化してから建てられた建物の可能性を強く示す物証であると言える。当町を含む長岡宮東方の三坊以東の低地理の始まりやその性格を考える上では、かなり重要性のある資料と見ている。

第48図の1は、中国宋からの輸入白磁碗の底部片である。底部の削り出しの高台形状からは、

やや幅のある玉縁口縁が付くタイプであり、いわゆる華南産白磁と総称されるものの一種である。同系統のものは、列島では平安時代中期末(11世紀後半)以降から平安時代後期、及び鎌倉時代初頭頃まで出土例が続く。高台片だけで断定はできないが、先の時代幅の内では、



第48図 平安時代後期の中国宋輸入白磁

11世紀末~12世紀前半あたりに収まるだろう。包括的には平安時代後期の輸入白磁と見ておく。 第49回に掲載した遺物は、中世の溝などから出土した平安時代末期から室町時代前期頃に位置付けられる遺物である。図示した瓦器類は全て楠葉産であり、乙訓へは水運でもたらされたも

のだろう。楠葉産の土師器皿の小片もいくつか出土しているが、図示するに至らなかった。  $1\sim6$  は瓦器境の口縁部や底部である。全て楠葉産と見ており、外面にヘラ磨きを持つものは

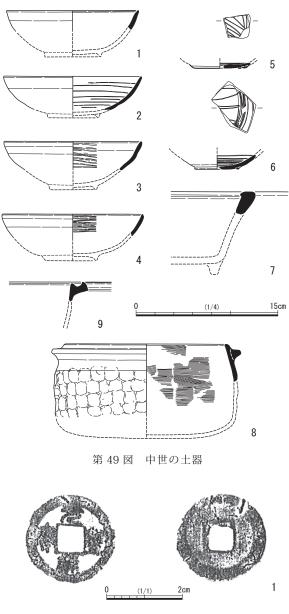
ほぼ無く、内面のヘラ磨きも少し粗いものから大きく粗いものまでの幅が認められ、平安時代末

期の 12 世紀後半 $\sim 14$  世紀前半頃の幅には 収まるものである。

7は円形の瓦器盤の口縁部であり、13世紀前後の時期には収まる。8は瓦器羽釜であり、体部が若干下膨れを呈し、三足が付く開形の羽釜の可能性がある。9は瓦器鍋の口縁部小片である。既に立ち上がりと受け部が一体化したものとなっており、室町時代前半頃以降から15世紀前半に掛かっていても良いと見ている。これらの3点も全て楠葉産の搬入品である。

当地を含む乙訓地域の中世的土器類で主体を成し、一見では当地の地域色を持っているように見える土師器皿や瓦器塊・鍋・釜・盤は、その多くが楠葉からの搬入品が主体を占めているようである。

第50図の1は、中世の遺物包含層から単独で出土している中国宋からの輸入銭貨である。「元豊通寶」であり、いわゆる北宋銭である。用途の特定は出来ないが、中世前半頃に農業を主体としていたこの地域は、都の近郊であったためか、貨幣経済に組み込まれていった可能性を示す物質資料である。



第50図 中国輸入銭貨

第1表 出土土器一覧表

(単位:点)

												\7	单位:点)
時代別	引出土	出土遺構土器	層他	試掘調査区土坑・ピット	溝 珠 遺 構	建 物 1 8 3	(S60-①)	(S60-①下層)	(S60-@)	流路1(360-②最下層)	(S60-②) 流路2	(860-②下層)	合計
縄文時代							3						3
弥 生 時代	弥 生土器	高坏他 食 壺 甕 壺 か 甕 他 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	22		2 2			1 6 11	1 9 5 99	11 54	13 5 8	19	2 41 23 204 270
古墳時代~		7 #1	須恵器高坏1										1
奈良時代													
	土師器	食器(高坏) 煮炊き甕 他	125(14) 46 1	6 5 1	126(14) 15 4	28 5 2	131(19) 21 14	50 8 1					466 100 23
		小計	172	12	145	35	166	59					589
	ı	黒色土器A 食器(坏B)	坏1 27(4)	3	7(2)	1	11(2)	8(4)					5 57
長岡	須惠器	良命(小B) 壺	10	3	2	'	11(2)	8(4)					23
京期		甕	30	6	35	3	38	6					118
		鉢	2	Ü	1	J	1	· ·					4
		他	円硯1				円硯1						2
		小計	70	9	45	4	62	14					204
		緑釉単彩	2	1	1		1	1					6
		瓦	20	1	5	8	12	3					49
平 安 時	前中 5期 後	9世紀~ 11世紀末~	灰釉1				鉛釉1 灰釉1						3
代	期	12世紀					白碗2						2
鎌室	1 1 3 4 世紀 5	土師器類	26				2						28
鎌倉時代~		瓦器類	46		9		8						63
5 初		他 小計	73		9		11						93
室町時代期	1 1 5 6世紀~		瓦器鍋 1										1
近世	16世紀末~		染碗 1 赤絵 1										2
近代以降	19世紀後~		6										6
	合	計	371	23	212	47	260	95	114	65	26	21	1234

第2表 出土遺物観察表

挿図番号 掲載番号	図版 番号	地区・遺構・層位	種類・器形 (型式名)	法 量 (口径φ、器高H 残存値には 残)	色調	胎 土 租・密や含まれる岩石・鉱物の 大きさ(φ ※mm以下など)と量	焼成	残存率 口線※%など	備考
第41図 1	13	流路1	弥生土器 台付鉢	(残H3.3)	にぶい黄橙色 胎土の中心 灰色	やや密 1mm以下の石粒を多く含む	良	口縁10%以下	
第41図 2	13	流路1	弥生土器 台付鉢	(残H2.8)	にぶい黄橙色 胎土の中心 灰色	密 金雲母少し	良	口縁10%以下	
第41図 3	13	流路1	弥生土器 水柱把手	φ1.6×1.25 残存長6.8	浅黄橙色	密 赤色粒少し	良	-	
第41図 4	13	暗茶褐色泥砂 粘質土(下層)	弥生土器 壺	(残H2.5)	灰白色	密 1mmの石粒を含む	良	口縁10%以下	
第41図 5	13	流路1	弥生土器 壺	(H1.25)	灰白色 胎土の中心 灰色	やや粗 3mm以下の石粒を多く含む	良	口縁10%以下	
第41図 6	13	流路1	弥生土器 壺	(φ24.0) (残H2.6)	浅黄橙色 胎土の中心 暗灰色	密 2mm以下の石粒を含む	良	口縁6%	
第41図 7	13	流路1	弥生土器 壺	(φ16.0) (残H7.0)	浅黄橙色	やや粗 3mmの石粒を含む 2mm以下の石粒を多く含む	良	口縁8%	
第41図 8	13	流路1	弥生土器 壺	(φ24.0) (残H4.8)	灰白色 胎土の中心 灰色	やや密 2mm以下の石粒を多く含む	やや良	口縁10%	
第41図 9	13	流路1	弥生土器 壺	(残H3.7)	灰白色 胎土の中心 灰色	密	良	_	指頭圧痕文突帯
第41図 10	13	流路1	弥生土器 壺	(φ18.0) (残H2.0)	灰白色 口縁端部 褐灰色	やや粗 3mmの石粒を含む 2mm以下の石粒を含む	良	口縁7%	
第41図 11	13	流路1	弥生土器 壺	(φ25.0) (残H3.2)	灰白色 胎土の中心 灰色	密	良	口縁7%	
第41図 12	13	暗茶褐色泥砂 粘質土(下層)	弥生土器 甕か	(残H4.7)	灰白色 胎土の中心 灰色	やや密 1mm以下の石粒を多く含む	良	口縁10%以下	使用痕(スス付着)
第42図 1	13	流路2	弥生土器 甕	(残H5.2)	灰白色~ にぶい黄橙色	やや密 1mm以下の石粒を多く含む	やや良	_	第42図-2と同一か
第42図 2	13	流路2	弥生土器 甕	(残H6.6)	灰白色~ にぶい黄橙色	やや密 1mm以下の石粒を多く含む	やや良	_	第42図-1と同一か
第42図	13	流路2	弥生土器 壺	(残H4.2)	灰白色	やや粗 6mmと3mmの小礫を含む 1mm以下の石粒を多く含む	良	_	
第42図 4	13	流路2	弥生土器 壺	(底φ9.2) (残H9.0)	外面 灰黄褐色 内面 灰褐色~黒色	やや粗 5mm以下の石粒を多く含む	やや良	底部ほぼ完形	
第42図 5	13	流路2	弥生土器 壺	底 φ 6.4 (残H1.5)	灰白色	やや粗 3mm以下の石粒を多く含む	良	底部5%	
第42図 6	13	流路2	砥石 砂岩	6.4×7.0	灰白色~黄灰色	_	_	_	
第43図 1		流路2	木製品(柄)	(残存長27.8) (残存幅5.9)	_	_	_	_	S=1/2
第43図 2		流路2	木製品(加工)	(残存長28.0)(残存幅5.4) 厚さ0.4	_	_	_	_	鑑定2
第43図 3		流路2	木製品(加工)	(残存長16.2) (残存幅2.5)	_	_	_	_	S=1/2
第44図 1		流路2	木製品(斜め材)	(残存長69.1) φ5.2×5.3	_	_	_	_	S=1/2
第44図 2		流路2	木製品(斜め材)	(残存長66.8) φ5.3×6.4	_	_	_	_	S=1/2
第44図 3		流路2	木製品(斜め材)	(残存長66.2) φ3.9×4.4	_	_	_	_	S=1/2
第44図 4		流路2	木製品(斜め材)	(残存長64.8) φ3.9×4.8	_	_	_	_	S=1/2
第45図 1	13	暗茶褐色泥砂	須恵器 高坏	(沈線φ16.0) (残H3.5)	外面 灰色 胎土と内面 灰白色	密	良	_	
第46図 1	14	溝22	土師器 境A	(φ12.2) (残H3.0)	にぶい赤褐色	やや密 1mm以下の石粒を多めに 含む 金雲母 赤色粒	良	口縁11%	ヘラケズリ C手法
第46図 2	14	溝状遺構5	土師器 境A	(φ13.0) (残H3.0)	にぶい黄橙色に 少し橙色	密 1mm以下の石粒を少し含む 金雲母	良	口縁10%	
第46図 3	14	流路1	土師器 境A	(φ13.0)(残H3.0) 推定H3.9	橙色	密	良	口縁14%	
第46図 4	14	流路1	土師器 境A	(φ13.1)(残H3.0) 推定H3.9	にぶい橙色	やや密 1mm以下の石粒を多く 含む 2mmの赤色粒あり	良	口縁6%	
第46図 5	14	溝1下層	土師器 坏A	(φ17.0) (残H3.4)	にぶい赤褐色	密	良	口縁13%	
第46図 6	14	建物3	土師器 皿AⅡ	( φ 15.6) H2.8	にぶい黄橙色〜橙色	やや密 1mm以下の細かい石粒を含む	やや良	口縁20%	ヘラケズリ C手法
第46図 7	14	流路1	土師器 ⅢA I	(φ19.8)(残H2.05) 推定H2.3	にぶい橙色	やや密 1mm以下の細かい石粒を多く含む		口縁12%	ヘラケズリ C手法
第46図 8	14	遺構面清掃	土師器 皿AI	( φ 20.6) H2.3	にぶい赤褐色	やや密 2mm以下の石粒を多く含む	良	口縁9%	
第46図 9	14	流路1	土師器 皿AI	(φ20.8)(残H2.5) 推定H2.6	明赤褐色	やや密 金雲母 赤色粒 1mm以下の細かい石粒を多く含む	良	口縁7%	
第46図 10	14	流路1	土師器 ⅢAI	(φ21.0)(残H2.2) 推定H2.5	にぶい明赤褐色	やや密 赤色粒少し 1mm以下の細かい石粒を多く含む	良	口縁12%	

挿図番号 掲載番号	因版 番号	地区・遺構・層位	種類·器形 (型式名)	法 量 (口径 φ、器高H 残存値には 残)	色調	胎 土 租・密や含まれる岩石・鉱物の 大きさ(φ ※mm以下など)と量	焼成	残存率 口線※%など	備考
第46図 11	15	溝20	土師器 坏B蓋つまみ	φ 2.8 (残H1.6)	にぶい橙色	密 金雲母 赤色粒	良	つまみのみ	
第46図 12	15	遺構面検出	土師器 坏B蓋	( φ 22.0) (残H1.5)	にぶい橙色	密 細かい石粒を含む	良	口縁6%	
第46図 13	14	流路1	土師器 坏A	(φ18.6)(残H3.5) 推定H5.4	にぶい橙色	やや密 1mm以下の石粒を多く含む	良	口緑7%	
第46図 14	15	流路1	土師器 高坏坏部	(φ29.8) (残H3.0)	にぶい黄橙色	やや密 3mmの石粒、1mm以下の 石粒を多く含む	良	口緑7%	
第46図 15	15	流路1	土師器 高坏脚端部	( φ 18.0) (残H2.6)	にぶい褐色	やや密 2mm以下の石粒を多く含む	良	口縁5%	
第46図 16	15	重機捆削(暗茶褐色 泥砂粘質土上層)	土師器 高坏	(φ30.0) (残H2.0)	にぶい橙色	密 2mm以下の石粒を多めに含む 赤色粒	良	口縁5%	
第46図 17	15	溝21	土師器 高坏	(φ12.4) (残H2.05)	にぶい橙色	やや密 1mm以下の細かい石粒を 多く含む 赤色粒	良	脚端部15%	
第46図 18	15	重機捆削(暗茶褐色 泥砂粘質土上層)	土師器 壺	( φ 10.2) (残H3.9)	にぶい橙色	やや密 細かい石粒を多く含む 赤色粒	良	口縁3%	
第46図 19	15	溝22	土師器 甕	( φ 17.0) (残H2.05)	にぶい黄橙色 口縁部 と胎土の外側 黒色	やや密 1mm以下の石粒を多く含む	良	口縁3%	南河内形
第46図 20	15	暗茶褐色泥砂 粘質土	土師器 甕	(φ21.0) (残H2.4)	にぶい赤褐色	やや粗 4mm以下の石粒を多く含む	良	口縁5%	南河内形
第46図 21	15	暗茶褐色泥砂 粘質土	土師器 甕	( φ 30.0) (残H2.8)	浅黄橙色~ にぶい橙色	密 金雲母 赤色粒	良	口禄4%	都城形
第46図 22	14	流路1	土馬	顔長5.7 顔幅3.7	灰白色	密	良	頭部のみ	
第46図 23	15	暗茶褐色泥砂 粘質土(下層)	須恵器 坏B蓋	φ 14.6 (残H1.9)	灰白色	密	良	口縁13%	使用痕 (硯に転用か 墨付着)
第46図 24	15	溝18	須恵器 坏B蓋	( φ 16.5) (残H1.2)	灰色 口縁部 暗灰色	密	良	口縁11%	
第46図 25	15	流路1	須恵器 坏B蓋	( φ 18.4) (残H1.7)	灰色	やや密 6mmの小礫、2mm以下の 石粒を含む	良	口縁8%	
第46図 26	15	流路1	須恵器 坏B身	(高台 φ 7.4) (残H3.35)	灰色	密 1mmの石粒を含む	良	高台31%	
第46図 27	15	溝18	須恵器 坏B身	(φ15.2) (残H4.7)	灰色	密 2mm以下の石粒を含む	良	口縁17%	
第46図 28	15	流路1	須恵器 坏B身	(高台 φ 11.6) (残H2.35)	灰白色	やや密 2mmの石粒を含む	やや良	高台12%	
第46図 29	15	遺構面清掃	須恵器 甕	(底 φ 17.0) (残H6.5)	胎土 赤灰色 表面 灰色	やや密 3mmと2mmの石粒を多く 含む かなり細かい石粒を多く含む	良	底部10%	
第46図 30	15	溝18	須恵器 甕	(頸部φ23.8) (残H4.3)	灰色	やや密 3mm以下の石粒を多く 含む 黒色粒	良	頸部22%	
第46図 31	15	溝19	須恵器 甕	(残H15.8)	灰色 胎土 灰白色	やや密 4mmの小礫を含む	やや良	_	
第46図 32	14	暗茶褐色泥砂 粘質土	緑釉単彩 火舎	(高台φ27.2) (残H4.4)	にぶい黄橙色	密 1mm以下の石粒を含む	良	高台6%	
第47図 1	16	建物1	平瓦	(残存長10.1)(残存幅10.0) 厚さ1.7~1.9	表面 黒色 胎土 灰白色	3mmの砂を混じえる 1mm以下の砂を混じえる	やや軟	_	
第47図 2	16	建物1	平瓦	(残存長8.0)(残存幅9.0) 厚さ1.8~2.0	表面 灰色 胎土 灰白色	4mm~2mmの砂を混じえる 細かい砂を多く混じえる	やや硬	_	
第47図 3	16	建物1	平瓦	(残存長16.0)(残存幅13.3) 厚さ1.5	表面 灰色~暗灰色 胎土 灰白色	4mmと2mmの砂を混じえる 細かい砂を混じえる	硬	_	桶巻か 模骨の痕あり
第47図 4	16	建物1	丸瓦	(残存長11.2)(残存幅12.6) 厚さ1.7~2.05	表面 灰色 胎土 灰白色	4mm以下の砂を多く混じえる 凸面にハナレ砂	やや軟	_	凸面に縄目痕あり
第48図 1	16	流路1	輸入陶磁器 白磁 碗	(推定φ16.0) (高台φ6.6)(残H1.25)	灰白色	緻密	良	高台8%	低い輪高台
第49図 1	16	溝22	瓦器 埦	(φ14.0) (残H2.2)	灰白色	密	良	口縁5%	
第49図 2	16	流路1	瓦器 埦	(φ14.6) (残H3.5)	口縁部と胎土 灰白色 体底 暗灰色	密 1mm以下の石粒を多く含む	やや良	口縁11%	
第49図 3	16	溝18	瓦器 埦	(φ14.6) (残H3.0)	灰白色	密	良	口縁7%	
第49図 4	16	溝18	瓦器 埦	(φ15.0) (残H2.3)	胎土 灰白色 表面 暗灰色	密	良	口縁3%	
第49図 5	16	溝状遺構8	瓦器 埦	(底φ5.6) (残H0.55)	胎土 灰白色 表面 暗灰色	瓷	良	高台10%	
第49図 6	16	溝1下層	瓦器 境	(底φ4.7) (残H1.5)	胎土 灰白色 表面 灰色	密	良	高台17%	
第49図 7	16	遺構面清掃	瓦器 盤	(残H2.35)	にぶい橙色 胎士の中心 灰色	密 2mm以下の赤色粒 金雲母	良	口縁10%以下	楠葉産
第49図 8	16	流路1	瓦器 羽釜	(φ17.5)(羽根φ20.0) (残H7.7)	外面 黒色 内面 暗灰色 胎土 灰白色	密	やや良	口縁3% 羽根8%	使用痕(スス付着)
第49図 9	16	遺構面清掃	瓦器 鍋	(残H2.0)	灰色	密 雲母	良	口縁10%以下	楠葉産
第50図 1	16	遺構面検出	銭貨「元豊通寶」	φ 2.4 穿0.65×0.65	_	_	_	_	拓本のみ

## 2. 柵用材を含めた流路 1、流路 2 から出土した木製遺物の樹種について

奈良県立橿原考古学研究所 福田さよ子

#### はじめに

京都市伏見区久我西出町 5 番 15 においておこなわれた発掘調査の際に出土した、木質遺物の 樹種の調査をおこなったので報告する。ここでは、弥生時代後期の土器が含まれる流路 2 から 出土した木質遺物 13 点の樹種同定を実施した。

#### 試料採取と同定作業

整理室に持ち帰られた遺物から、同定に供する小ブロックを試料サンプルとして採取した。このとき遺物の写真に採取した個所をマークし、オリジナルの加工痕と区別できるようにした。

研究室に持ち帰った各試料は、両刃のカミソリを使用して木口・柾目・板目の各面の薄切片を 徒手切削し、プレパラートに仕上げて透過光の生物顕微鏡下で組織の観察をおこなった。同定に 際しては参考資料の写真や記載を参照し、材鑑試料のプレパラートと照合しながら観察をおこ なった。

#### 同定結果

同定の結果、針葉樹 3 樹種(イチイ、コウヤマキ、ヒノキ)と広葉樹 6 樹種(アカガシ亜属、 ニレ属、クワ属、ヤマハゼ、モチノキ属、カクレミノ)の 9 樹種が識別できた。各遺物の番号 と同定結果を一覧表(第 3 表)にまとめ、樹種別の顕微鏡写真(第 51・52 図)を掲載する。顕 微鏡写真には、[写真番号 樹種名 遺物番号(=試料番号)断面名称 写真の倍率]を併記し、 目安になるようにスケールを付した。

以下に観察所見と同定に至った根拠となる各樹種の特徴を記載する。

なお、記載の順番は島地・伊東1982 林1991 に準拠した。

・イチイ (Taxus cuspidate Sieb. et Zucc.) イチイ科 (Taxaceae)

仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹。早材から晩材への移行は比較的緩やかである(写真 1)。 分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 2 個ずつ存在する(写真 2)。仮道管内にはらせん肥厚が存在する(写真 2・3)。放射組織は単列で 1 ~ 25 細胞高前後のものが多い(写真 3)。

・コウヤマキ(Sciadopitys verticillata (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科(Sciadopityaceae) 仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹。早材から晩材への移行は比較的緩やかである(写真 4)。 分野壁孔は窓状で放射方向に長い唇状ものが多い(写真 5)。放射組織は単列で  $1 \sim 15$  細胞高を測る(写真 6)。

## ・ヒノキ (Chamaecyparis obtusa Endl.) ヒノキ科 (Cupressaceae)

仮道管と放射柔細胞および樹脂細胞からなる針葉樹。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部付近に樹脂細胞が点在する(写真 7)。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 2 個ずつ存在する(写真 8)。放射組織は単列で 1 ~ 15 細胞高を測る(写真 9)。

#### ・アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科 (Fagaceae)

広葉樹。大きなもので径 200  $\mu$  m ほどの厚壁で丸い道管が、単独で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材。柔細胞は顕著で、接線方向に 2 ~ 3 細胞幅の独立帯状柔組織を形成する(写真 10 ~ 13)。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性である。柔細胞にはしゅう酸石灰の結晶が含まれる(写真 14)。また、放射組織は単列のものと広放射組織とがあり、単列のものは 1 ~ 20 細胞高ほどを測る。広放射組織は集合型と複合型の中間的な様相を呈する(写真 15)

#### ・ニレ属 (Ulmus) ニレ科 (Ulmaceae)

広葉樹。年輪のはじめに、直径 250  $\mu$  m前後の大道管が 2 ~ 3 列で孔圏部を形成し、孔圏外の道管径は急に小さくなる環孔材である。孔圏部には大道管がほぼ単独で配列し、孔圏外では小道管が多数集まって花束状・接線状・斜線状に配列する(写真 16)。道管の穿孔は単穿孔で、小道管にはらせん肥厚が見られる。放射組織は同性で、しばしばしゅう酸石灰の結晶を持つものが認められる(写真 17)。放射組織は  $1 \sim 8$  細胞幅で、長いもので 1 mm の高さを測る(写真 18)。

## ・クワ属 (Morus) クワ科 (Moraceae)

広葉樹。年輪界に沿って直径 250~300  $\mu$  mの大型の道管が並び孔圏を形成する環孔材である。 孔圏内の大道管は  $1\sim 2$  列で、単独または  $2\sim 3$  個複合する。孔圏外の小道管は、 $2\sim$ 数個が小塊状または接線方向に複合する。道管内にはチロースが充填する(写真 19)。道管の穿孔は単穿孔で、小道管にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性で結晶が存在し(写真 20)、その幅は  $1\sim 6$  細胞列である(写真 21)。

## ・ヤマハゼ(Rhus sylvestris Sieb. et Zucc. ) ウルシ科(Anacardiaceae)

広葉樹。年輪内にほぼ均等に道管が散在する散孔材であるが、年輪のはじめにはやや径の大きな道管が配列する(写真 22)。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性。稀に結晶が認められる(写真 23)。放射組織は  $1\sim 2$  細胞列で長いものはその高さが 600  $\mu$  m ほどになる(写真 24)。

#### ・モチノキ属 (Ilex) モチノキ科 (Aquifoliaceae)

広葉樹。径 50  $\mu$  m ほどの小さな道管が、年輪界に関係なく均質に分布する散孔材。道管は放射方向に数個複合するものが認められる(写真 25)。道管の穿孔は階段穿孔で、道管にはらせん

肥厚が認められ、木繊維にもらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で稀に結晶が存在する。(写真 26)。放射組織の幅は  $1\sim6$  細胞列で、高さは 1mm 前後のものも存在する(写真 27)。

モチノキ属にはモチノキ、タラヨウ、イヌツゲ、アオハダ、ソヨゴ、クロガネモチ、ナナミノ キなどがあるが、木材の組織から詳細な識別は困難であるためここでは属の同定にとどめてお く。

## ・カクレミノ (Dendropanax trifidus (Thunb.) Makino) ウコギ科 (Araliaceae)

広葉樹。年輪のはじめに、大きいもので径 100  $\mu$  m ほどの道管が単独あるいは数個複合して並び、年輪の外に向かって徐々に径を減じる道管が配列する半環孔材(写真 28)。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織はほぼ同性であるが一部に方形の大型なものも認められる(写真 29)。放射組織の幅は  $1\sim 4$  細胞列で 2 列のものが多くを占める。また放射組織に水平樹脂道が存在する (写真 30)。

カクレミノは本州 (関東以西),四国,九州に分布する、暖地の林内に生える常緑小高木。

#### <参考資料>

島地 謙・伊東隆夫,1982,『図説木材組織』地球社

林昭三,1991,『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

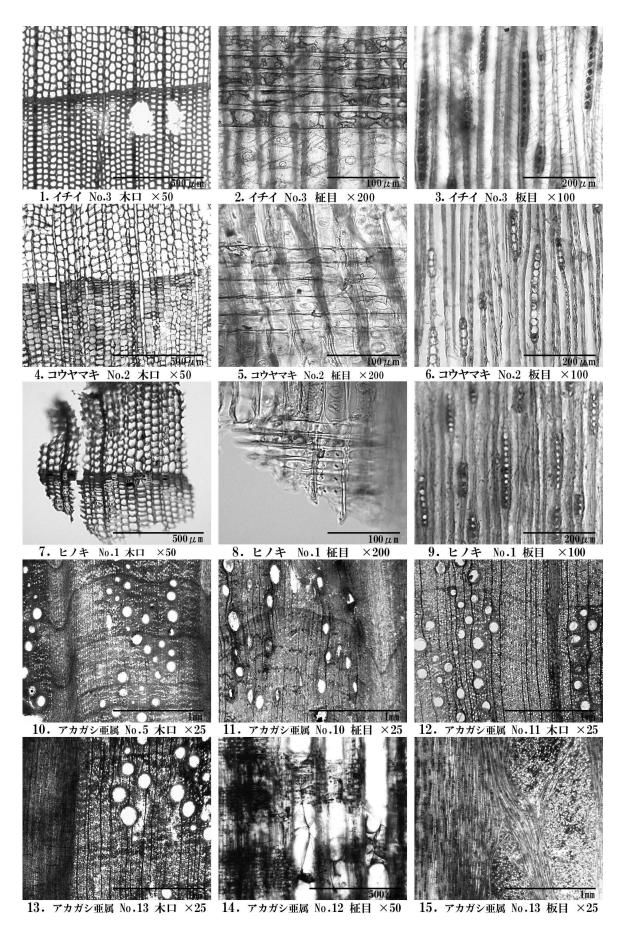
Wheeler E.A.et all, (編),1998,『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト 広葉樹材の識別』. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修),海青社

森林総合研究所 日本産木材データベース

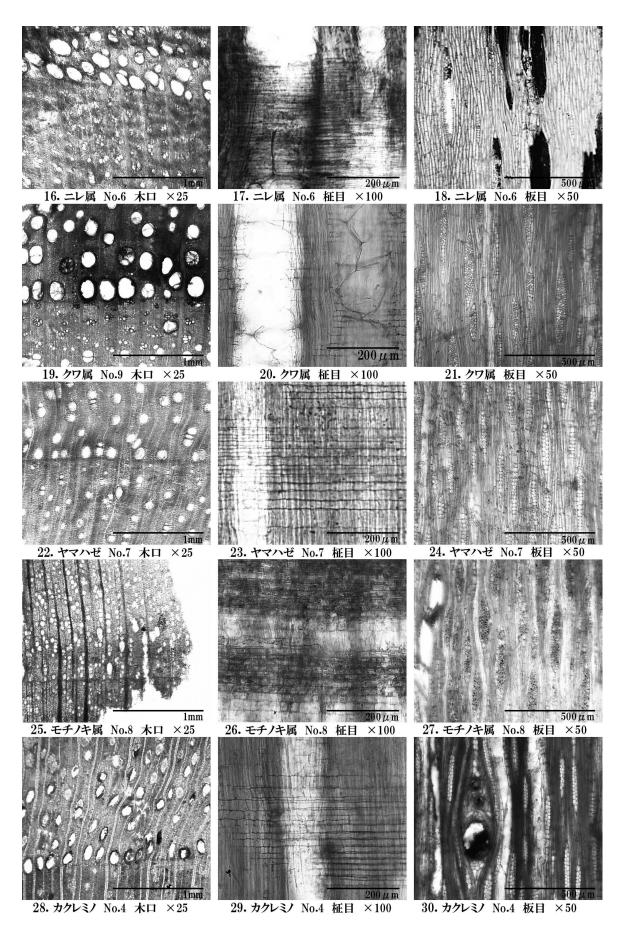
京都大学生存圏研究所 生存圏データベース 木材標本ならびに解剖学データ

第3表 出土木質遺物樹種同定結果一覧

サンプ ルNo.				科名	
1	長弓か (第43図-3)	流路2	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ科 (Cupressaceae)
2	板状木製品 (第43図-2)	流路2	コウヤマキ	Sciadopitys verticillata (Thunb.) Sieb. et Zucc.	コウヤマキ科 (Sciadopityaceae)
3	木製把手 (第43図-1)	流路2	イチイ	Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.	イチイ科 (Taxaceae)
4	柵斜材 (第44図-3)	流路2	カクレミノ	Dendropanax trifidus (Thunb.) Makino	ウコギ科 (Araliaceae)
5	栅斜材 (第44図-4)	流路2	アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	ブナ科 (Fagaceae)
6	流木	流路2	ニレ属	Ulmus	ニレ科 (Ulmaceae)
7	柵構成材	流路2	ヤマハゼ	Rhus sylvestris Sieb. et Zucc.	ウルシ科 (Anacardiaceae)
8	柵斜材 (第44図-1)	流路2	モチノキ属	Пех	モチノキ科 (Aquifoliaceae)
9	栅斜材 (第44図-2)	流路2	クワ属	Morus	クワ科 (Moraceae)
10	柵構成材	流路2	アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	ブナ科 (Fagaceae)
11	流木	流路2	アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	ブナ科 (Fagaceae)
12	流木	流路2	アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	ブナ科 (Fagaceae)
13	流木	流路2	アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	ブナ科 (Fagaceae)



第51図 出土木質遺物樹種顕微鏡写真1



第52図 出土木質遺物樹種顕微鏡写真2

# 第5章 考察とまとめ

## 1. 考 察 - 長岡京期の建物配置と敷地使い-

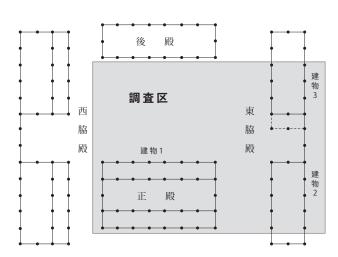
ここでは、今回の調査によって検出し記録調査した、長岡京期の建物 1 ~ 3 を建物の配置の 面から捉え直し、邸宅としての敷地使い、及びそれらの認識を手掛かりとして宅地班給について も考えておく。

今回の調査では、南面する正殿と見ている東西棟の建物 1、南北両庇含めて南北 4 間(各 10 尺〔約 3m〕等間隔)×東西 5 間(各 9 尺〔約 2.7m〕等間隔)、及び東脇殿として良いだろう 8 尺(約 2.4m)等間隔の身舎だけの南北棟を 2 棟検出している。建物 1 の北辺と建物 2 の北辺はほぼ揃っており、建物間は約 12.8m 程である。建物 2・3 は東辺で連結しているが、本体は 2 間(約 4.8m)離れて、西に面して南北に 2 棟が並置されている。北側の脇殿である建物 3 が、正殿と見られる建物 1 の後ろとなる北側へ大きくずり上がっている点には、ここでも注意しておく。

今回の調査で検出した建物 3 棟とその建物配置に対する理解を深める目的で、長岡京に限らず、古代都城全体を対象に既往発掘調査の報告資料を追跡調査した。この成果では、京都府により 1979・80 年頃に調査された平安京右京一条三坊九町において、建物規模や占有敷地に違いはあるが、今回検出した建物群の配置とほぼ共通する、宮殿と称し得る大邸宅跡が発見されていることを知り得た。現在は山城殿とも仮称されているこの大邸宅に関しては、太田静六著の『寝殿造の研究』においても、寝殿造の祖型にはあたらないという視点から取り上げられている。

平安京右京一条三坊九町の邸宅跡の主要建物群の柱間は、10尺(約3m)を基本としており、京域の宮殿では最大の柱間を持ち、正殿も東西7間と最大クラスの大きさである。今回検出した建物とは柱間の距離が若干異なるとはいえ、正殿と東脇殿の配置関係はまったく共通するものである。東脇殿となる南北2棟の内、南側のものは正殿とほぼ並ぶが、北側の建物は北へずり上がっ

ており、一部は後殿に並ぶ。今回検出した建物群と類似度を示す意味もあり、太田が作成した九町の建物配置略図を今回の調査の建物配置と仮定して調査区範囲を合成した概念図を作成し、第53図に掲載した。この図を見ると、時間差や都城の違いはあるが、共通する設計図に基づいて、九町側では1町使いの敷地に大型化した宮殿として建設されたと見て良いと考えられる。長岡京期と平安時代初頭という時間の近さからは、設計や施

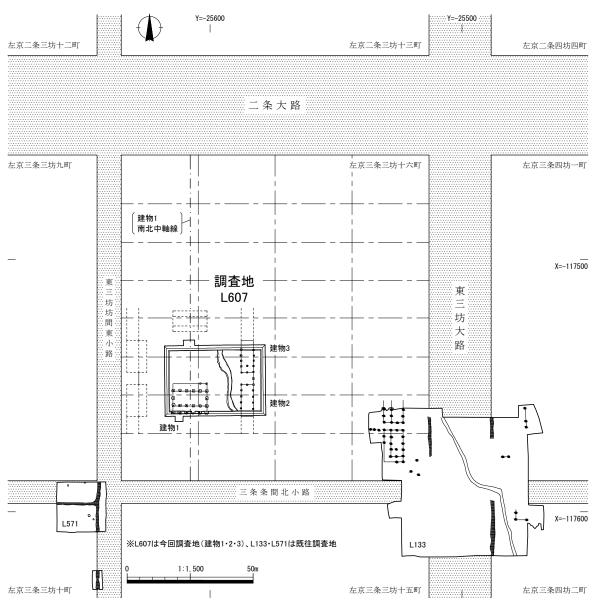


※太田静六著『寝殿造の研究』吉川弘文館 (1987年) から転載し、一部改変を加えた。 第 53 図 京都市山城高校遺跡建物配置図との合成概念図

工者も共通していた可能性も検討が必要だろうと考えているが、追及は今後の課題だろう。

この平安京右京一条三坊九町の建物配置を利用し、実数値は今回調査分の規模で未検出分まで含めて、同様の構造を持つが少し小規模な邸宅の復元案を図化した。それを今回の調査区と検出建物を合わせて、既往調査成果を用いた長岡京左京三条三坊十六町の推定図に組み込んだものを第54図に掲載している。この図では、今回の調査分の東西棟正殿の南北中軸線も入れておいた。この図を見ると、今回の調査の調査区外となるが、後殿や西脇殿も発掘調査が出来れば検出される可能性が大きくなったが、これは今後の調査に期待したい。論理的に推定可能な建物群が全て存在していたとしても、全て半町規模の敷地内に収まるとの推測も大過ないところであろう。

適当な距離で後殿を設定しても、半町使いでは敷地北部に大きな空間が存在することになるが、 邸宅の附属施設である倉庫や、雑舎群が展開するスペースと理解することは無理のないところで あろう。



第54図 推定長岡京左京三条三坊十六町における長岡京期建物位置図

宅地班給の面から見ると屋敷地半町の班給は、平安京では 4・5 位という殿上人としては下級ではあるが、全体から見れば上層に入る貴族が対象となっている。1 町や 2 町または 4 町使いは、藤原家の一部、あるいは皇族に限られている。なお、同じ十六町内の南東部付近の既往調査において、庇付きの脇殿とも見られる南北棟の建物が、南北に 2 棟並んで検出され調査されている。主要建物の配置は若干異なる可能性が高いが、こちらも半町、あるいは 1/4 町の敷地使いの邸宅の一角を検出しているものと推測される。

藤原京以来の古代都城跡の京内邸宅の報告例は、昭和以降大きく増加しており、1 町や2 町または4 町使いの大邸宅跡の報告例は少なくないが、半町使いが明確に報告されている例は意外と知られていない。今回の調査成果はその意味では、貴重な資料となるだろう。

## 2. まとめ

本発掘調査を実施出来たことによって得られた調査成果は、1期奈良時代以前、2期長岡京期、3期平安時代以降の大きく3時期に括って理解し、それぞれの内容を示す形で報告書を作成している。ここでは3期に渡る成果を通覧する形で、当地の土地利用史の全体像を概観し、当地域の土地利用史の特質を理解することで、調査成果のまとめとしておく。

1期の内では、弥生時代前期から中期の早い段階までは、宅地的にとどまらず水田を含む耕作地的土地利用も始まっていなかった。そのため、縄文時代以来の低湿地的な地形をベースとした自然が形成した景観が保たれていたようである。人の手が加わる土地利用史的な意味での1期は、弥生時代中期から長岡京期直前までの奈良時代末期までである。出土遺物からは、柵(しがらみ)を含めた大規模な流路1(下層)及び流路2の整備は、弥生時代中期後葉頃には完成しており、機能していたと見られる。柵を設けた大型の流路2は、現在の西羽東師川と同様に、流路2の東から南へと広がる桂川沿いの低地帯の水田への用水の確保と、各水田への配水を目的とした流路と考えている。柵は田へ水を上げるダムアップ施設と見ている。流路1は、北西の微高地側の宅地、あるいは耕作地からの排水用の水路であり、調査区南部で流路2へ合流する。

当地域の水田を中心としていたと見られる耕作地的土地利用は、弥生時代中期の内には既に始まっていたと理解して良いだろう。

調査区西半の微高地上面は、長岡京期にかなり削平されてしまっており、居住と関連するような遺構は残存していなかった。しかし、流路2下層部などからの遺物の出土状況からは、弥生人の中期集落は中期後葉頃には調査区内の西半から北西方向へ延びると見られ、微高地上付近にまで進出してきていた可能性が高い。しかし、弥生時代後期の遺物がほとんど出土しない点からは、集落などは中期末の頃までにはもう少し高い所か、母村へと引き上げてしまったものと考えられる。

弥生時代後期以降から奈良時代にかけては、完全に継続していたかについては理解が難しいが、 当地の少し南西や北西から北部の近接微高地帯には、鶏冠井清水遺跡、鶏冠井遺跡、東土川遺跡 など弥生時代中期段階で集落が既に進出している。各集落ともに弥生時代後期から古墳時代、さらに古代へと発展的に継続した複合遺跡として知られている。このような近接地帯の土地利用状況やこの時期の出土遺物の少なさからは、調査地を含む低湿地を主体とする当地域は、水田稲作を中心とした耕作地帯として、近隣の集落が分け合って利用していたものと見ている。

2期は、土地の長い歴史から見るとほんの一瞬とも言える、延暦3年(784年)から延暦13年(794年)の10年間程の、当地域が長岡京の都市域内に組み込まれていた短い期間である。調査区は、向日市の長岡京条坊復元図に拠ると、長岡京の北東部域となる左京四条以北の、町名では左京三条三坊十六町内に位置すると推定される。調査区内で街路などは検出されていないが、同町内の南東部の既往調査地(第52図L133)での、当町の東辺とされる東三坊大路西側溝やその側溝西側の十六町の南東部において、側溝と南北軸線を共有する建物跡などの調査成果と合わせると、今回の調査区が同十六町の南西部と大きく重なるとの見方、及び復元図における条坊の絶対位置もほぼ妥当なものであると見ることが出来る。

調査では、正殿と見ている南北2面庇を加えて4間(10尺等間隔)×東西5間(9尺等間隔)の東西棟と、脇殿と見ている8尺等間隔の2間×4間以上の南北に並ぶ2棟の南北棟を検出している。調査出来た3棟の建物は、東脇殿が正殿よりも大きく北へずり上がっている。平城京以前の宮殿クラスの大邸宅でも基本となっていた、主要建物のいわゆるコの字型配列は、長岡京期では既に変化が進んでいたことを示す物証である。また建物や建物群の配列規模などの土地利用のあり方からは、半町(南北約110m×東西約55m=約6000㎡)使いの敷地利用と理解される。半町の宅地班給がほぼ実証的に把握出来たことも加えて、長岡京期の遺構面の調査から得られた成果は大きいものがある。

半町規模の宅地班給は、平安京であればその内では下級であるが、殿上人の内に位置している 全体から見ると、かなりの上級貴族の邸宅であったと見て良いだろう。

また正殿建物1と東脇殿2棟との間に、一定の水量があったであろう流路が確保されていた 点も注意される。平安京の1町クラス以上の邸宅であれば、南底の南の池へ注ぐ遣水との見方 も必要になる。しかし、ここでは宅地内の排水を担う流路と見ておく。建物群の南側隣接地の調 査を待って再検討したい。

3期の調査区を含む当地域は、長岡京域内となった短い期間が過ぎると、平安時代以降から中世、近世、さらに近代から戦後の現代まで続く形で、水田を中心とした低湿地帯の耕作地帯へと戻っている。当地域の生業は、低湿地的地形に大きく規定されたものとなっており、地形が最も中心的な特質となっている。周辺地域では、古代後半期以降に集落の再編が進み、荘園化の進展とも関連した京近郊の新しい農村集落が形成されてゆく。調査区を含む当地域は、中世、近世、近代に至るまで、京近郊の水田耕作を主体とした農村地帯として、京都とともに緩やかではあるが発展が続く。その近郊の農村集落を中心とした田園風景は、戦後さらに変形しつつあるが、現在にまで色濃く残っている。しかし、昭和後半から平成、令和にかけて進む工業地化や宅地化の変化の大波は、長岡京期を越えて弥生時代以来から近・現代にまで続いた、歴史的な水田を中心

とした京近郊の農村風景を根底から大きく変えてしまうだろう。当地域の歴史にとって現代は、 長岡京期や弥生時代中期を凌駕する大きな画期となるだろう。

## 図 版



1. 調査地全景 東から (長岡宮跡・西山を望む)



2. 平安時代から中世 遺構面検出状況 西から



3. 中世以降の水田及び湿地完掘状況 南西から



4. 中世以降の水田及び湿地完掘状況 北西から



5. 平安時代以後の遺構 V 群溝検出状況 北から

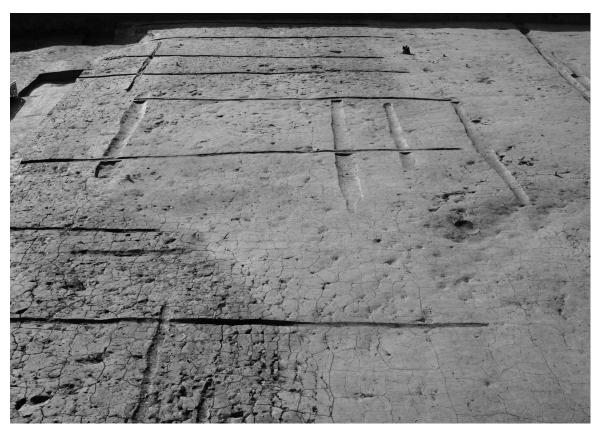


6. 平安時代以後の遺構 V 群溝完掘状況 北から



7. 近世~近代以降、中世 Ⅰ・Ⅱ 群溝完掘状況 北から 8. 中世 Ⅱ 群溝 12・13 完掘状況 南から





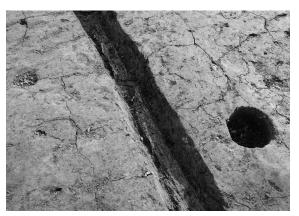
9. 中世 Ⅳ群溝状遺構群完掘状況 北から



10. 溝状遺構 3 暗渠竹材 北から



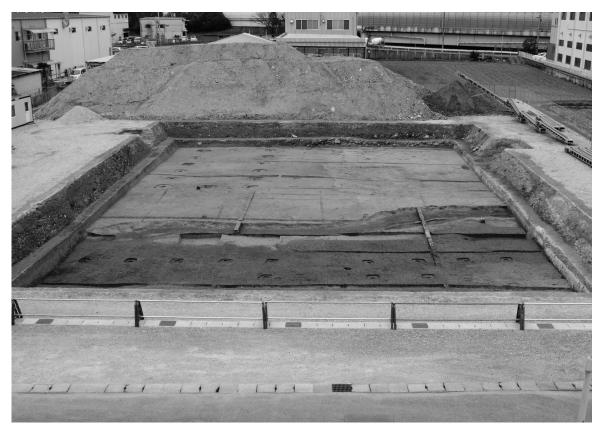
11. 溝状遺構 10 暗渠竹材 北から



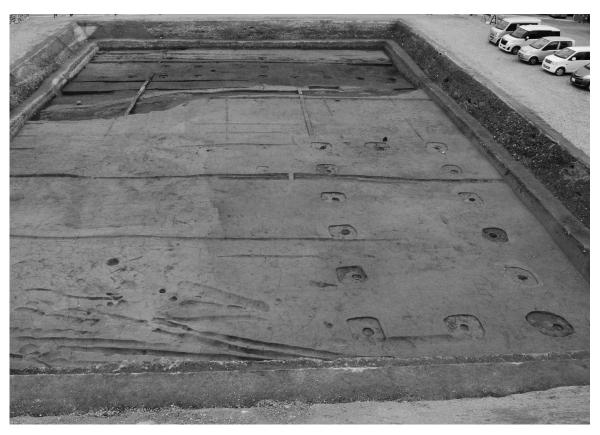
12. 溝状遺構 11 暗渠竹材 北西から



13. 溝状遺構 11 暗渠竹材 北西から



14. 長岡京期 全景(建物1~3・流路1) 東から



15. 長岡京期 全景(建物1~3・流路1) 西から



16. 長岡京期 建物 1 身舎・北庇 南から



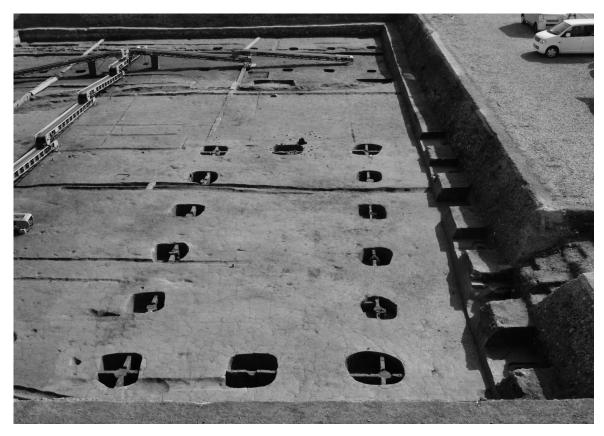
17. 長岡京期 建物 2・3 北から



18. 建物 2 北から



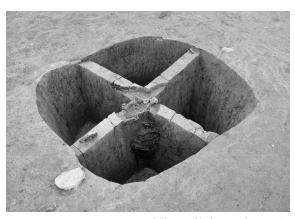
19. 建物 3 北から



20. 建物 1 全景 西から



21. 建物 1 全景 北から



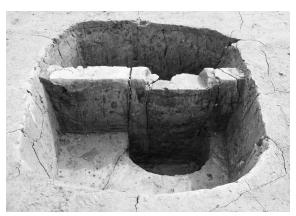
22. 建物 1 柱穴 6 南西から



23. 建物 1 柱穴 7 西から



24. 建物 1 柱穴 11 北から



25.建物1 柱穴12 北から



26. 建物 1 東辺柱穴列 手前柱穴 20 北庇 北から



27. 建物 1 南庇 柱穴 21 東から



28. 建物 1 南庇 柱穴 24 北から



29. 建物 2 柱穴 1 東から



30. 建物 2 柱穴 2 東から



31. 建物 3 柱穴 2 西から



32. 建物 3 柱穴 7 西から



33. 流路 1 上層 建物 2・3 南から



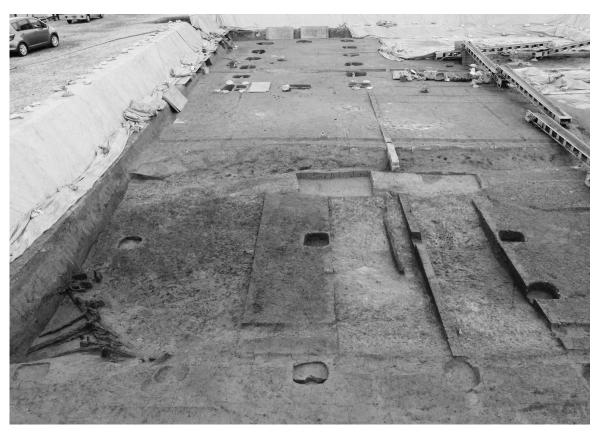
34. 流路 1 上層 建物 2・3 北西から



35. 流路 1 下層・流路 2 南東から



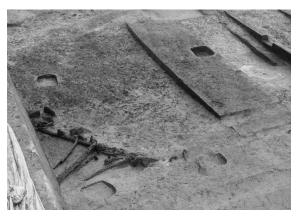
36. 流路 1 下層・流路 2 (柵) 南東から



37. 流路 1 下層・流路 2 (柵) 東から



38. 流路 1 下層・流路 2 全景 北から



39. 流路 2 柵検出 南東から



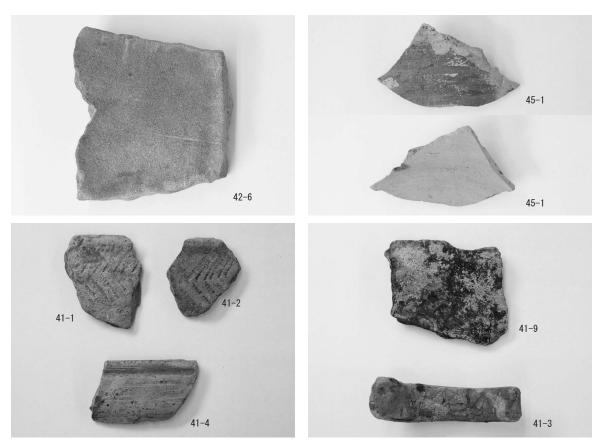
40. 流路 2 柵 南東上から

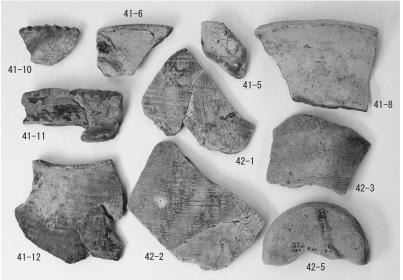


41. 流路 2 柵 北西から



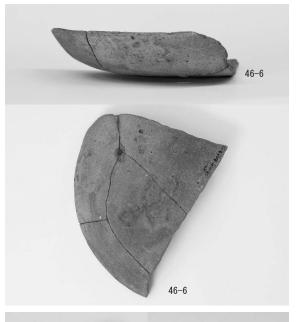
42. 流路 2 柵 北から





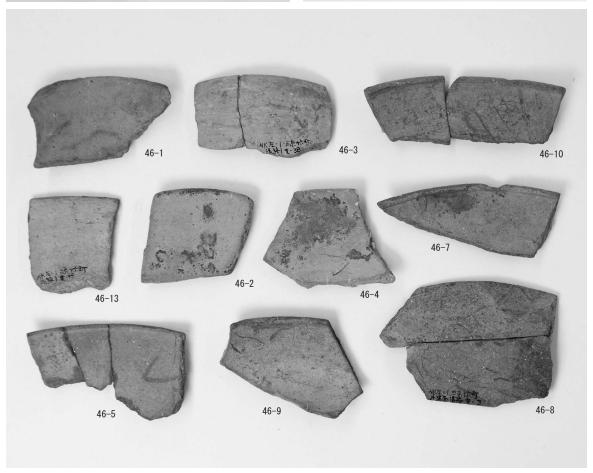


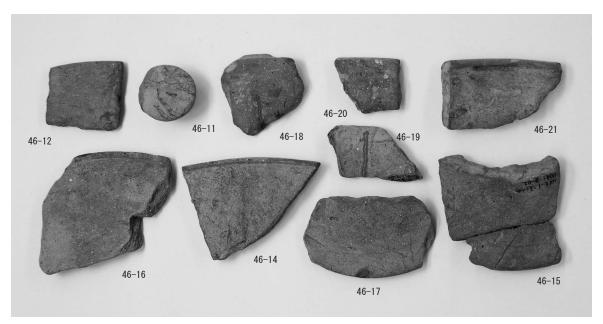








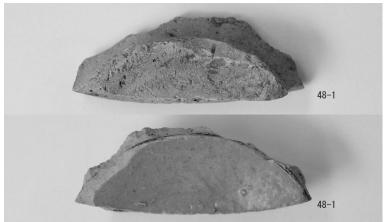


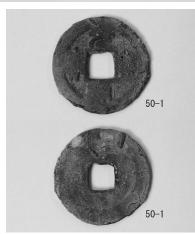


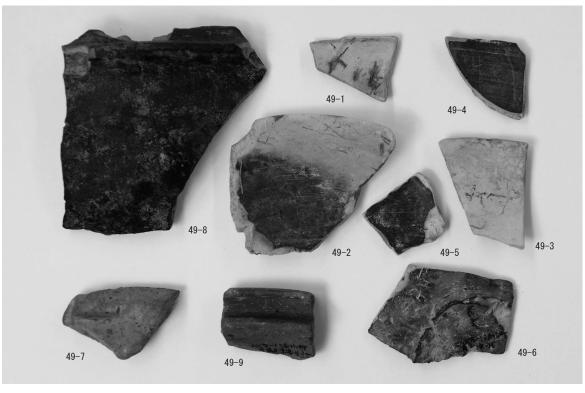












## 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうさきょうさんじ	ながおかきょうさきょうさんじょうさんぼうじゅうろくまちあと										
書 名	長岡京左京三条三坊十六町跡											
副 書 名												
巻 次												
シリーズ名	京都平安文化財発掘調査報告											
シリーズ番号	第 10 集											
編著者名	小泉信吾・小森俊寛・小林雅幸・福田さよ子											
編集機関	有限会社 京都平安文化財											
所 在 地	〒 612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後 20-4											
発行年月日	年月日 2020年3月19日											
ふりがな所収遺跡名	ふ り が な				# 4∀	細木伽明	囲木云往	細木匠口				
	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因				
ながあきょうあと 長岡京跡 さきょうさんじょう 左京三条 さんぼうじゅうろくちょう 三坊十六町	きょうとしぶしみくこが 京都市伏見区久我 にしでちょう 西出町 5-15	26109	3	34 度 56 分 24 秒	135 度 43 分 13 秒	2018年 12月11日 ~ 2019年 3月15日	1,120m²	工場建設				
所収遺跡名	種別 主な時代	主な遺構	3	主な遺物		特記事項						
長岡京跡 左京三条 三坊十六町		冊(しがらみ) 赤路遺構 弥生土器・石製品・木製		・木製品	柵(しがらみ)施設を含む流路遺構							
	古墳時代	土師器										
		建物跡 流路遺構		土師器・須恵器・布目瓦 土馬・輸入白磁		建物跡(正殿・東脇殿)						
	中世	暗渠	瓦器・羽釜・古銭		暗渠遺構							
要約	約 寄生時代中期後葉頃の流路及び柵(しがらみ)遺構 長岡京期の建物跡 3 基(南北庇付き正殿 1 基・東脇殿 2 基)											

令和 2 年(2020年)3 月 19 日発行

## 長岡京左京三条三坊十六町跡 (京都平安文化財調査報告 第10集)

編集 有限会社京都平安文化財 〒 612-8018 京都市伏見区桃山町丹後 20 番地 4 電話 075-644-6600

印刷 あおぞら印刷株式会社 〒 604-8431 京都市中京区西ノ京原町 15 電話 075-813-3350